

市立大町山岳博物館
60年の歩み



 大町山岳博物館

市立大町山岳博物館開館60周年を迎えて

このたび、市立大町山岳博物館が、創立60周年を迎えることができました。今日の喜びを、関係各位とともに喜びを分かち合いたいと思います。

山岳博物館は、戦後の混乱もようやく落ち着き、新しい社会の建設に力強い槌音がこだまする昭和26年11月1日に開館しました。豊かな自然と郷土を深く愛し、新たな文化を希求する当時の青年達は、寝食を忘れ積極的に資料の収集や調査、自主サークルの運営に没頭し、博物館の創設、発展に奔走しました。これは現在のボランティア活動そのものであり、協働によるまちづくりの原点でもあります。その後、山岳博物館は、身近な地域社会での教育文化の振興を基軸として、独創的な調査研究や教育普及の活動を進める一方、地域の特色ある観光の拠点施設として、多様で幅広い活動を展開してまいりました。

大町市は、山岳博物館創立50周年を契機に、平成14年に山岳文化都市を宣言し、21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造に努めております。先人達が精神のよりどころにした北アルプスと、そこから享受する山岳文化は現在も私たちの心に残り、形あるものとして存在しています。そして、これからも永遠に存続することを願うものであります。

また、この記念すべき年に、創立50周年の大きな節目を迎えられました長野県山岳協会のご厚志により、記念事業として貴重な山岳図書資料と資料館建設のためのご寄附を賜り、山岳図書資料館を建設する運びとなりました。

山岳博物館が、山岳文化都市形成の拠点として、今後の生涯学習の推進のために果たすべき役割は極めて大きく、そのためにもなお一層の博物館の活動の充実に努めてまいります。

60年間、山岳博物館を育くみ支えていただいた皆様に心から感謝申し上げ、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げますとともに、広く市民に愛され、親しまれる博物館として、さらに発展することを祈念して、ごあいさつといたします。

平成23年11月

大町市長 牛 越 徹

市立大町山岳博物館60年の歩み

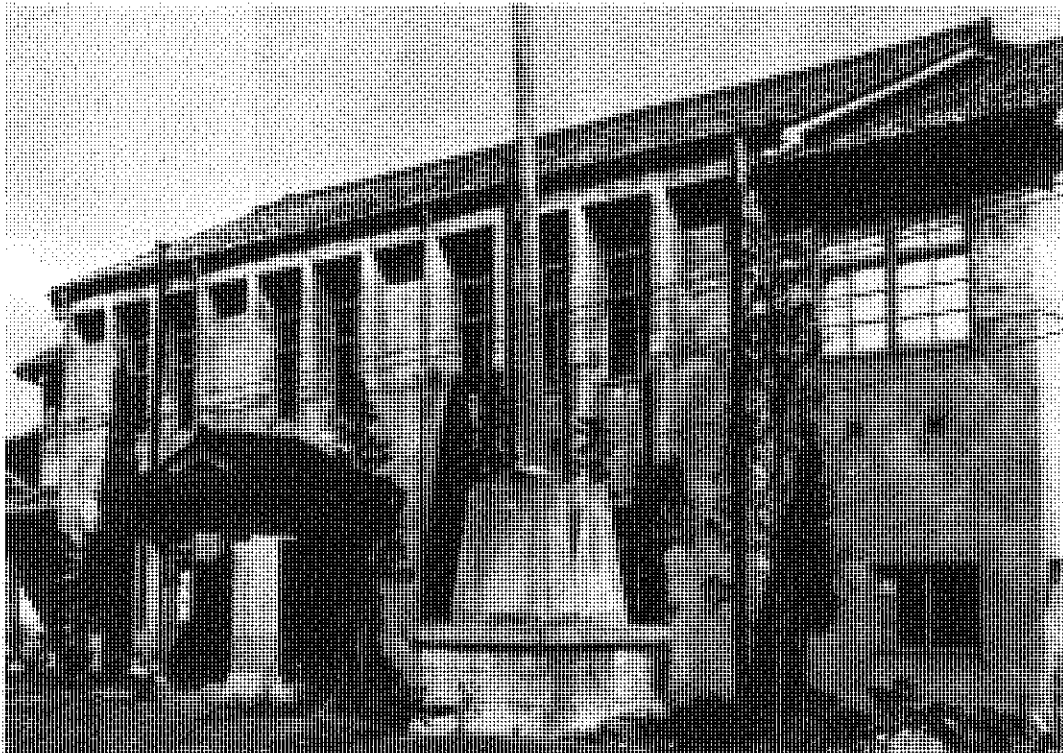
1. 開館まで

昭和22年5月3日、新しい日本国憲法施行の日、町立大町図書館は公民館として発足した。当時青年団を主体とした若者たちは、終戦直後の混沌とした社会情勢の中で公民館建設に新しい夢を託して立ち上がりつつあった。

この日催された講演会で一志茂樹氏（当時松本市立博物館長・大町出身・故人）は、「新しい地方文化向上のために郷土の特殊性を生かし、私たちは北アルプスの大自然をもう一度見直さなければならない」と述べ、青年たちをいたく感激させた。

この10月に発表された青年たちの公民館運営の構想の中に公民館郷土部の設置があった。この頃から青年たちは、郷土文化を興隆するためには、町の立地条件から山岳博物館の設置こそが最重要課題であると結論し、それが郷土部の掲げた最高の目標であった。郷土部の青年たちはこの構想に基づいて具体的な行動に移った。

それから4年後の昭和26年11月1日、青年たちの熱意は日本で最初の山岳博物館を誕生させたのである。



郷土部がおかれていた大町公民館

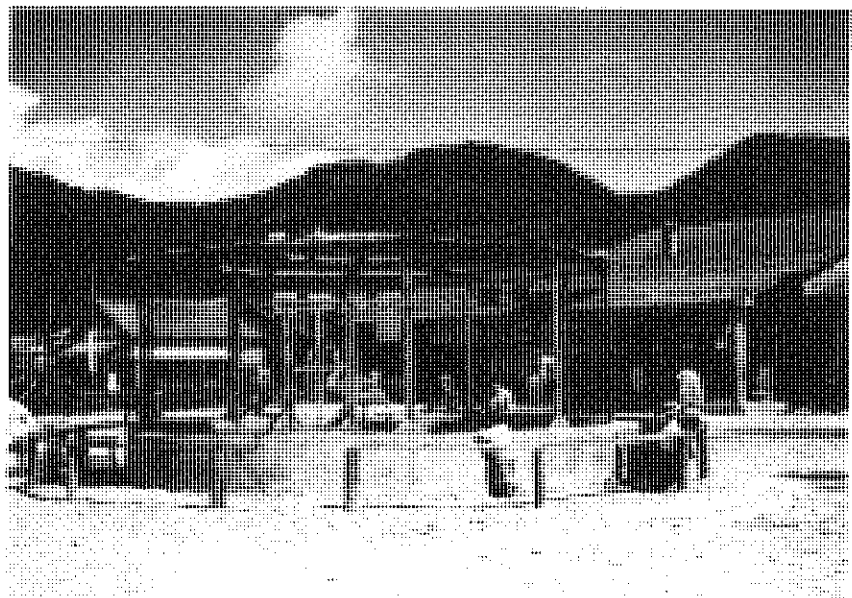
2. 沿革

昭和26（1951）年度

- 人口わずか17,000人の山奥の小さな町に博物館を生まだした青年たちと、関係者の英知は内外から注目を集めた。11月1日の開館と同時に大町文化祭に参加、11月6日まで開催されたこの文化祭は町民を初め多くの人々が観覧し、延観覧者数は11,551名に達し新生博物館への関心の高さを示した。
- 昭和24年1月20日に高瀬川で保護されたオオハクチョウの飼育用の禽舎が、8月に大町駅前に完成し、大町南高校の仮飼育舎から移され飼育が始められた。
- 昭和26年12月1日、博物館法が公布され、全国的にもようやく博物館活動の気運が高まってきた。



初代博物館の開館式



駅前の水禽舎



初代博物館



展示室

昭和27（1952）年度

- 8月20日、山岳博物館は博物館法に基づいて、長野県教育委員会経由で登録博物館となった。
- 山岳博物館の嘱託員は長野県下の水禽類調査をはじめ、定期気象観測、北アルプスの高山植物の調査研究および採集、民俗資料の収集など各種分野の調査、収集にあたった。
- 大町の文化祭に参加、「山岳大展示会」を開催した。
- 12月23日には苑地整備としてパーゴラガーデンの建設、内部充実のため古代スキーの模型、スキー解説パネル、山岳地模型が製作され、これらの経費は設備費国庫補助金があてられ以後も続いて交付された。
- 5月29日、毎日世界ニュースが博物館施設を取材、6月29日には林虎雄長野県知事が来館、6月23日にはNHKが創設期の苦心談を全国放送するなど博物館はさまざまな面から注目されるようになる。



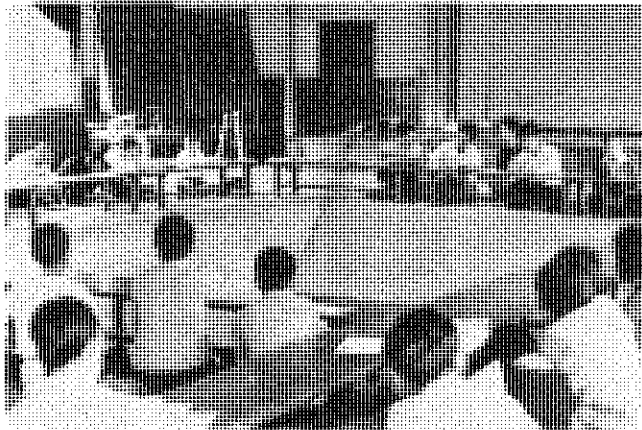
パーゴラガーデン

昭和28（1953）年度

- 4月12日、付属動物園のクマ舎の工事が着工され、また同日、駅前整備にともない水禽舎を移動し、大町駅前にあったロックガーデンは本館の裏庭に移転。8月12日にはニホンイヌワシ1羽が入園した。
- 大町駅構内の博物館資料陳列所の展示替えを行うと共に、展示の充実を計るため山岳開拓者の上條嘉門次、遠山品右衛門らの遺品の収集が行われた。
- 11月1日から5日までの文化祭に参加、特別展を行った。

○7月5日、創設期以来の関係者によって「博物館研究会」が発足した。これは各自の研修はもちろんのこと、10年後の文化運動を支えるような後続の若い芽を育てることが目標とされた。発会時の入会者は180名である。

○11月3日、日本山岳会が行ったマナスル登山の遠征隊員であった、加藤泰安氏を招き「マナスル登山講演会」を中学校の講堂で開催し多くの町民に好評であった。



博物館研究会総会（大町公民館）



ニホンイヌワシの飼育

昭和29（1954）年度

○昭和29年7月1日、大町、平村、社村、常盤村の1町3カ村が合併して大町市が誕生した。この市制施行にともない市立大町山岳博物館条例、山岳博物館協議会規定が施行される。

○動物園の整備充実を計りイヌワシ舎の建設が行われ、5月29日完成と共に仮住居の飼育舎からイヌワシを移した。

○山岳部門の展示強化を計るため山岳資料の収集を計り、文化祭では「山岳大展示会」「標本コンクール」を開催した。

○嘱託員の各氏の調査研究報告が次々と発行され29年度末までに28輯を数えた。

○大町市内および北安曇郡下の小・中学生を主体とした博物館研究会は一般も含めて会員は375名にもなり、年間22回もの観察会などの活動が行われた。また、博物館より76,000円の助成を得て、研究会の月刊機関紙『大町山岳博物館研究会報』第1号を4月20日に発行した。



『研究会報』の発行

昭和30（1955）年度

- 事務室の拡張工事として博物館への入り口を南側に新設した。
- 山岳資料の資料収集費には社会教育設備費補助金があてられ以後も交付された。
- 全国の山岳団体との結び付きを計るため、山岳団体の会報、機関紙、バッチ、その他資料の収集を始め、11月1日からの大町市文化祭には「北アルプスを開拓した人々」「山岳バッチ展」「山岳写真展」を開催した。
- 博物館研究会の活動は関係者のたゆまぬ努力で、戸隠自然観察会、八方山研究登山、星を見る会、岩石採集会、動植物採集会、スキー会等々を行った。
- 31年2月20日、広報および教育普及活動の手段として、山岳博物館の月刊機関紙『やまと博物館』（その後、『山と博物館』と改称）第1号を発行し、現在まで継続して発行し続けられており、全国の読者に親しまれている。
- 31年2月2日、南安曇郡稲核村（現安曇村）で保護されたカモシカの幼獣が入園した。山岳博物館への入園第1号であるこのカモシカは、愛称を一般公募し「岳子」と命名された。岳子はその後、21年余にわたって飼育され、大町市民のアイドル的な存在として親しまれた。



八方山研究登山



ニホンカモシカ「岳子」入園

昭和31（1956）年度

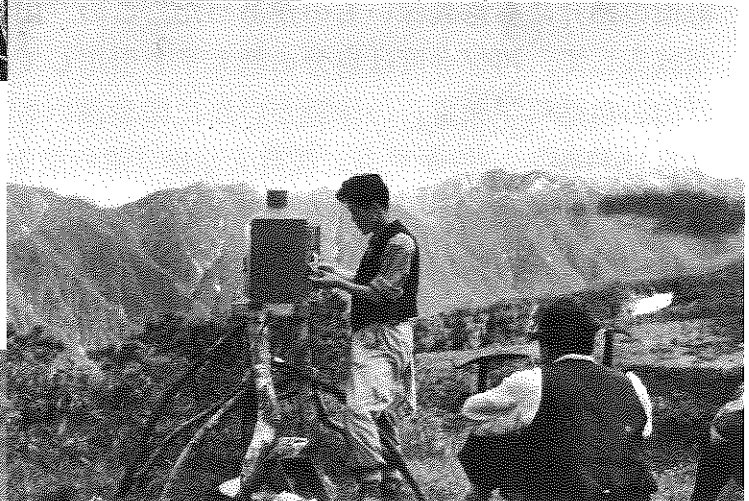
- 本館施設の拡充を計画し、7月に新館建設構想を前面に打ち出し、建設推進委員会において連日検討をした。7月16日、大町南高校の校舎の払下げを受けて、東山の台上（大町公園）に移築する案が市議会において可決された。7月20日、地鎮祭を行い、9月21日には基礎工事が終了、10月12日に上棟式と工事は順調に進み、11月には建物の移築が完了した。
- 市内の文化財調査が行われ、その年の文化祭で「文化財特別展」「山の生活展」「居谷里の自然展」「全国山岳バッチ展」が行われた。
- 北アルプス一帯を野外博物館として開設するため、北アルプス一帯の基礎調査の5ヵ年計画が立案された。その予備調査として、4月1日より「居谷里湿原総合学術調査」（湿原は現在長野県指定天然記念物）が開始された。調査団は地元の研究者、館員を総動員して構成され、年間の調査出勤人員は延600人を超え、収集資料は2,600点を数えた。
- 黒部溪谷に関西電力が、世界でも有数の発電用の巨大ダムを建設するため工事に着工した。このダムの発電能力を算定するために、黒部川上流域の雨量調査が2年計画で行われることになり、雨量計の設計元の明石製作所（本社・東京）と山岳博物館がこれに協力した。調査は春浅い5月から新雪の来る10月まで、数次にわたって長期的に入山し20台の自記雨量計によって観測が行われた。館員の出勤は延60人。その他嘱託員などが調査員として参加した。
- 動物記録映画『アルプスの驚異』（後に『白い山脈』と改める）製作について富士映画社より山岳博物館に協力の申し入れがあり、撮影案内と指導にあたることになった。4月から撮影が開始された『白い山脈』の指導のため嘱託員、調査員は館員と共に多忙な日々を送った。この映画は32年3月に完成し、文部省特選となったが、記録とフィクションの問題で話題をまいた。大町では3月6日より一般公開され地元の映画館始まって以来の観客数があり、また、北安曇郡下の小・中学校でも上映され反響を呼んだ。
- 第1回の「山の歌声」を6月9日に開催した。毎月2回定期的に開催し、当初35名のメンバーで発足したが、やがて参加者は急激に増加し会員は200余名にも達した。その後この会を40数回にわたって開催し、34年3月、「山の歌声」グループは「市民合唱団」へと発展解消した。



二代目博物館の建設



居谷里湿原でボーリング調査



雨量計調査



『白い山脈』の撮影

昭和32（1957）年度

- 新館建設の継続として、館内外塗装工事、給電・給水工事、廊下張り替え工事、玄関階段工事、館内模様替え工事を行ったが、動物舎は予算不足のため移転することができずそのままとなった。展示は鈴木貞三氏（応用美術社）が担当しパネル展示方式を取り入れた。
- 8月15日の大系線全通を記念して開館し、「大系線全通記念展覧会」を開催すると共に祝賀式を行った。創設以来6年目にして東山の大町公園に懸案の新館を建設できたのである。
- 恒例の文化祭には南極観測にちなんで「南極展」「山岳展」「染色展」「生物展」などを催し好評であった。

- 第2次黒部川上流域雨量調査は前年に引き続いて行われ、20台の雨量計による雨量データが集められたほか、黒部川上流域一帯の踏査を行った。5月より10月までの当館の職員、調査員の出勤日数は延147日におよんだ。
- 7月26日より6日間、東京教育大学（現筑波大学）野外研究同好会によって夏期大学および黒菱を根拠地として「第1回 山の自然科学教室」が実施された。これには都内6中学校127名の生徒も参加した。指導には、教育大、信州大の教官のほか当館職員、調査員、教育大学生等があたった。

自然に恵まれない都内の中学生には、八方山や大町市の自然が強い印象を与え、大町市の紹介にも意義深いものがあつた。この「山の自然科学教室」に参加した生徒等が成人して、再び今度は自分の教え子を引率して山岳博物館を訪れたことも再三あり、「山の自然科学教室」の体験がいかに印象深いものであつたかを伺わせた。
- 7月15日から30日まで東京教育大学の「博物館実習」が行われ、鶴田総一郎氏の指導のもと、37名の学生が参加し山岳博物館を通して博物館学の実地を研究した。この試みは中央との提携の新しいケースとして注目された。
- 10月12日、作家の深田久弥氏を囲んでの「山の文学を語る」座談会を公民館で開催し、多くの市民が参加した。
- 総合社会教育の一環としてグループ活動の育成が前年度から計られ、10月23日には「染色の会」が、続いて11月7日には天文研究グループ「銀河会」が、また11月17日、雨量観測を担当した調査員等によって構成される「登山研究会」が発足した。この登山研究会は昭和33年1月7日、博物館同好会の中から独立し、自主山岳団体「大町山の会」としてスタートした。その後国内の山岳の開拓はもとよりヒマラヤ遠征なども行い、現在も活発に活動を続けており、県内の山岳団体の指導的な立場にある。



二代目博物館



博物館実習



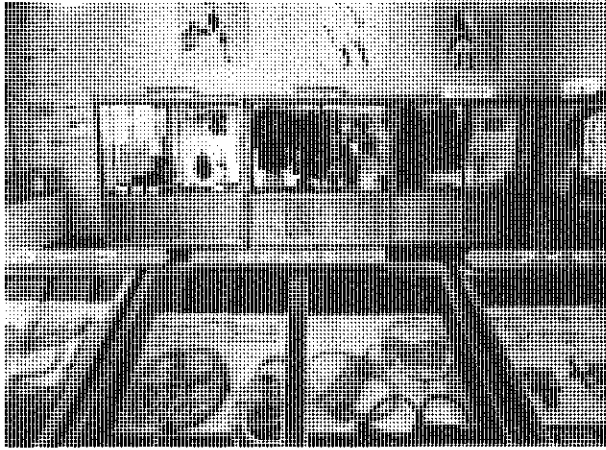
山の自然科学教室

昭和33（1958）年度

- 移転開館1周年を迎えて文化祭には「明治・大正・昭和の岳人展」を開催し、ほかに「上原遺跡展」「パタゴニア探検写真展」などを催した。展示整備としてこの年初めて常設ジオラマの製作に着手した。
- 山岳関係の資料収集には公民館等設備費補助金があてられ39年度まで交付された。
- 針ノ木自然園の開設運動が進められ、33年3月発足当初の観光審議会において基礎調査を正式に取り上げた。4月からは針ノ木自然園開設のための基礎調査が、信州大学教育学部生物学教室の協力のもとに行われた。43名の調査員は10月までに延443日を費やして入山した。貧弱な器材、装備に加えて交通費実費しか出せないといった状態の中で、調査員は懸命に調査に従事し、その成果は33年度末までに集積された。
- 公民館分館へ映画、スライドを持参しての移動博物館を市内の9分館で行うなど、公民館との提携の下に教育普及活動を行った。
- 7月17日から5日間、木崎湖畔で開かれた奈良市帝塚山学園の「林間学校」開設を応援し、150名の生徒に自然についての指導を行った。これは当館としては初めての派遣申請によるものであった。
- 第2回「山の自然科学教室」が居谷里湿原、八方山で行われると共に、6月21日～22日、松本、大町地方の同好者を集めて「エンレイソウを訪ねる会」を開催、8月9日から4日間、千葉県生物学会・信濃生物学会共催による「海と山を結ぶ会」（交流生物研究会）が大町で開催された。これは当館として初の共催事業であった。



玄関正面の北アルプス模型



展示室



針ノ木岳での植物調査

昭和34（1959）年度

- 大町市は地方財政再建特別措置法の準用を受け、35年度の予算編成にあたっては博物館の最低維持管理費を割る予算枠が示された。また、議会においても山岳博物館のパート転用論が飛び出すなどの事態に直面した。その結果は館長代理制の廃止、職員1名の減員、さらに1名を兼任とし、事業費はゼロ同然の予算となった。
- 文化祭を目標に、市内を始め全国から民芸関係の資料の収集を計り、文化祭には「お国自慢民芸展」「針ノ木自然展」「山岳展」などを行い、常設ジオラマ室の整備ではクマ・サルの2ジオラマの製作を行った。
- 33年に行われた針ノ木岳調査の報告書を『針ノ木岳－自然とその保護－』として出版した。
- 31年に行われた『居谷里湿原総合学術調査』の報告書を3月31日に発行した。
- 針ノ木自然園の基礎調査は昨年引き続いて行われ、植物のフロラ調査、白沢一帯のニホンザルの生態調査を開始した。また、教育資料の一環として『針ノ木』のカラー・スライドなどを作り、各種教育活動に使用した。さらに16mmカラー映画『自然の四季』の撮影を開始した。
- この数年活動が衰えていた「博物館研究会」は「博物館友の会」と改称して再出発した。「山菜採集会」「小鳥の声を聞く会」「鹿島の自然を訪ねる会」「南小谷植物採集会」「八方山研究登山」「星を見る会」「標本同定会」など数々の催しを行ったが、継続的指導に欠け成果はいま一步あがらなかった。
- 第3回「山の自然科学教室」を青木湖、佐野坂、八方山で行った。

昭和35（1960）年度

- 創設期から10年、山岳博物館は存続の危機を迎える立場に立たされた。その中で、厚生省が針ノ木自然園の計画を了承し、山岳博物館の分館を含む扇沢地域集団施設計画を進めつつあった。
- 36年3月27日、皇太子殿下（現天皇陛下）が来館され、館内の展示を始めカモシカ「岳子」を親しくご覧になられた。

○6月以来北安曇郡下の各地の民俗資料の収集を計り、多くの資料を収集した。恒例の文化祭には「昔の生活用具展」「登山用具の変遷」、また「高山の生物」ではイヌワシ、ライチョウのジオラマの製作を行い、常設ジオラマ室の製作が終わった。ほかに「東海道五十三次浮世絵展」も開催した。

○高山植物のコマクサの生態ならびに低地栽培の研究が長野県から委託され、これを機に当館の庭にロックガーデンを作った。そして、9月には志賀高原、白根山の实地調査をした。

○日本鳥学会、林野庁が主体になって北アルプスのライチョウを、富士山へ移殖する試みが進められた。鳥学会の要請に応じてこの事業に当館も協力して、8月21日、白馬岳から7羽のライチョウが関係者等の手によってヘリコプターで富士山に移された。

○昭和26年以来10年間、大町駅前の水禽舎で飼育されてきたオオハクチョウが、4月1日朝死亡した。それから半月余りたった4月中旬、諏訪湖で傷ついたオオハクチョウが保護され、当館に移送し、初代オオハクチョウについて飼育することになった。

○8月5日から10日まで当館との共催事業として信州大学生物学教室の野外実習を開催し、白馬岳ならびに針ノ木岳への研究登山を行った。

○第4回「山の自然科学教室」を居谷里湿原、八方山で実施した。

○友の会の活動として
「小鳥の声を聞く会」
「八方山・唐松岳日帰り登山」「秋の草花と鳴く虫の観察会」「冬の生物観察会」など多彩な催しが数多く開催された。



「岳子」にエサを与える皇太子殿下



富士山へライチョウ放鳥

昭和36（1961）年度

- 11月1日、創立10周年記念祝賀会を開催し、文化祭に参加し特別展を行った。
- 6月15日、高松宮ご夫妻、秩父宮妃がご来館見学された。
- 木崎湖湖畔に「白鳥の池」を作り、皇居外苑保存協会から2羽のコブハクチョウを移入し飼育を開始した。
- 当館職員、嘱託員、信州大学教育学部のメンバーで構成される外郭組織「北ア動物生態研究グループ」のライチョウ調査に対して、長野県科学振興会から300,000円の助成交付が昭和35年12月に決定し、当館では本年度の重点事業として信州大学教育学部のメンバーと共に、ライチョウ調査を爺ヶ岳において実施した。5月10日の入山以来10月7日まで150日間連続して調査が行われた。
- 日本における渡り鳥の恒久的継続調査を行うため林野庁が主体となって、全国10ヵ所で予備調査が始められ、当館はこれに協力して大町地域一円において野鳥標識調査を行った。この調査は次年度も継続された。
- 前年度に1羽のオオハクチョウの飛来を機に「木崎湖水鳥園期成運動」が地元の海ノ口地区子ども会、公民館、平獵友会その他関係者の協力を得て進められ、11月1日木崎湖は獵期を前に「禁獵区」になった。
- 地元の調査員、山岳団体関係者、職員で構成される外郭組織の「大町山岳研究会」は登山ガイドブック『白馬岳と鹿島槍』（実業の日本社刊）を出版した。
- 第5回「山の自然科学教室」を居谷里湿原、中綱湖、細野、八方山方面で行った。
- 友の会活動は衰退の傾向にあって本年は「小鳥の声を聞く会」の他、2事業を行った。
- 8月9日、当館動物飼育係の神社唯七氏は公務執行中に脳出血に倒れ急逝した。



春のライチョウ調査

昭和37（1962）年度

- 博物館は東山の台上に移転したが、動物園はまだ初代博物館の庭に設置されていた。この動物たちを東山に移すための予算が計上され、その計画の第一陣としてカモシカの飼育場の工事を開始し、11月末に933㎡の放飼場が完成し、引き続き他の動物の飼育舎の工事も開始した。
- 8月17日、第4回国立公園大会が志賀高原で開催され、当館の今までの活動が評価され長野県知事表彰を受けた。
- 黒部ダムの大町ルートを開放を39年に控えて、針ノ木自然園の扇沢集団施設計画の厚生省案が山岳博物館協議会、観光審議会の合同会議に諮られた。そして、この事業の具体化を市が主体的な立場から考慮するよう要望がなされた。
- 「シラサギ写真展」「高山蝶生態写真展」などの他、文化祭には「木曾街道六十九次浮世絵展」を開催した。
- 昨年度のライチョウ生態調査で調査ができなかった爺ヶ岳における冬期の調査を計画したが、調査経費が不足していた。この経費について長野県に補助金の要請をし、その結果800,000円の補助金交付が決定した。直ちに冬期調査計画が検討され、調査期間は38年3月12日から4月20日までの40日間と決まった。調査員は当館職員3名、通信関係の支援に陸上自衛隊松本駐屯地より2名の参加を得て行われることになった。また、調査が冬期であることと長期にわたるため多量の食糧と器材はヘリコプターを使用して荷上げが行われた。さらに入山時、途中の食料品の荷上げ、下山時には大町山の会の会員による支援を受けた。
- 第6回「山の自然科学教室」を居谷里湿原、中綱湖、細野、八方山方面で実施した。
- 8月には立教大学博物館学実習を、10月には東京教育大学博物館学実習を当館で開催した。
- 友の会は「カラスライド講習会」「小鳥の声を聞く会」を行った。



冬期のライチョウ調査

昭和38（1963）年度

- カモシカ飼育場の完成にともないカモシカの岳子を移し、引き続き動物を移転させるための飼育舎用敷地の整地工事を行い、移転準備に入った。
- 大町青年商工研究会からの観光望遠鏡、また当館の印刷費が不足しパンフレットの印刷ができないため市内商業者から山岳博物館用パンフレット30,000部の寄贈を受けた。これは46年まで続いた。
- 8月1日、第5回国立公園大会において厚生大臣表彰を受けた。
- 「夏山とライチョウ展」のほか、文化祭には「安曇の歴史展」を開催した。
- 7月23日から約1ヵ月にわたり、針ノ木自然園扇沢地区の調査が日本自然保護協会によって行われ、これらの調査員と市長、観光審議会委員、営林署、関西電力、教育委員、山岳博物館などの関係者による扇沢地区開発と利用についての懇談会がもたれた。また、扇沢集団施設の山岳博物館の分館問題については、各関係方面と協議が行われた。しかし、地方財政再建法の準用を受けている段階では予算計上は難しいと市当局は難色を示した。
- ライチョウの生態調査と並行して、低地におけるライチョウの飼育研究を開始した。また、9月13日には日本では初めて飛行機を使用して青森県からカモシカの輸送を行ったが、幼獣「青太郎」は懸命の飼育も空しく11月18日死亡した。
- 第7回「山の自然科学教室」を居谷里湿原、細野、八方山方面で行い、また、友の会では「小鳥の声を聞く会」を催した。



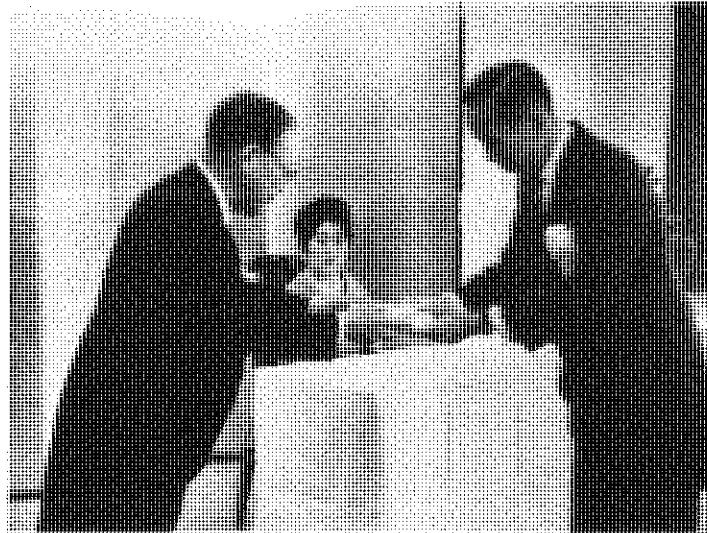
ライチョウ飼育の開始（チャボによる孵化）

昭和39（1964）年度

- 7月20日、黒部ダムが一般に開放された。同日、昨年末から計画を進めてきた『雷鳥の生活』3,000部が出版され、8月28日、黒部ダムを訪ねられた皇太子殿下に『雷鳥の生活』を献本すると共に、全国緑化大会の折に献本できなかった天皇陛下へも差し上げていただくようお願いした。
- 40年3月1日、当館の「山に関する科学の進歩についての著しい貢献」に対して、第2回秩父宮記念学術賞を授与した。
- 写真展「自然の顔」「タンチョウヅル」のほか、文化祭では「ギャチュンカン遠征特別展」「黒四関係展」を催した。
- 日本体育協会の「日本スポーツ史展」、国立科学博物館の「日本の天然記念物展」に当館として初めて山岳関係の資料貸し出しを行い、以後も各方面に貸し出しを行っている。
- 7月4日より8月10日まで、爺ヶ岳のライチョウ生息現地で移動禽舎を設置して中に親1羽、雛3羽を収容して家族群の生活状況、天敵との関係について調査を行った。また、10月5日から29日まで秋のライチョウの生活調査が実施され、これらの調査には職員と信州大学教育学部生態研究グループの学生があたり、出勤人員は延250名を超した。
- 低地飼育研究のライチョウ保護事業に初めて国庫補助金、県費補助金が交付された。この保護事業は途中一時中断したものの、補助事業として平成14年度まで続いており、自然産卵、孵化、育雛に実績をあげた。
- 海ノ口の「白鳥の池」で飼育中のコブハクチョウに初めて3羽のヒナが誕生した。
- 当館の飼育カモシカは1頭のみであり、増殖を計るためにカモシカの捕獲を計画した。4月、職員、調査員、ほかの6名で高瀬入に入山したが捕獲は不成功に終わった。また、同じ高瀬入では4月13日から6月23日までの間に、5頭のカモシカの死体を収容した。
- 第8回「山の自然科学教室」が黒沢高原、中綱湖、木崎湖、針ノ木谷方面で行われ、また、友の会では「小鳥の声を聞く会」を催した。



ライチョウの移動禽舎での飼育



秩父宮記念学術賞授賞式

昭和40（1965）年度

- 宿泊室の床が陥没したための床の張り替え、また大町ロータリークラブより寄附を受け老朽化した講堂と郷土室の床の張り替えも行った。
- 38年末より行ってきた動物舎移転のための整地工事が終了し、それに伴いキツネ、タヌキなどの獣類飼育舎、リスなどの小獣類舎、イヌワシ舎、大サル舎各1棟を建設した。
- 特別天然記念物カモシカの保護増殖事業に初めて国庫、県費補助金が交付され、カモシカ放飼場、幼体哺育舎、寝小屋、隔離保護舎、実験飼育舎、管理舎が建設され、本格的にカモシカの保護飼育を開始した。
- 5月27日、数年にわたって実施してきたライチョウの生態解明の調査研究の業績に対し、日本鳥学会より表彰を受けた。
- 皇居外苑保存協会から受け入れたコブハクチョウを将来木崎湖に放し、木崎湖を白鳥の湖にするという計画の下に、海ノ口の白鳥の池に隣接した湖畔に外柵を設け、コブハクチョウを馴致するための施設を建設した。
- 「郷土の風物写真展」「日本の動物写真展」のほか文化祭には「富嶽三十六景浮世絵展」を催した。
- 6月14日、秩父宮記念学術賞受賞を記念して、日本山岳会松方三郎会長を招き、大町市民会館と大町高校で「講演と山岳映画の夕べ」を開催し、多くの市民、高校生が参加した。
- 6月4日、鹿島川で保護されたイヌワシの受け入れ、6月24日には小県郡真田町からカモシカの幼獣（後に大助と命名）を受け入れ人工哺育を行った。当館としてはカモシカの人工哺育成功第1号であり、大助はその後14年余にわたって飼育された。
- 第9回「山の自然科学教室」を大谷原、木崎湖、針ノ木谷方面で行い、友の会では「小鳥の声を聞く会」を催した。



『雷鳥の生活』出版



ニホンカモシカ人工哺育第1号の「大助」

昭和41（1966）年度

- 42年3月21日、アナグマ舎、トビ舎、ノスリ舎の移転で動物園関係の移転は全て終了した。
- 文化祭には「篠田義一展」を行い、その他展示室充実のため展示設備補助金が交付された。
- ライチョウの生態映画を文化財保護委員会、長野県、静岡県、山梨県が協力して製作することになり、指導協力を文化財保護委員会から依頼された。そのため北アルプス爺ヶ岳を中心に映画『特別天然記念物ライチョウ』の撮影を4月5日から開始した。現地指導には当館職員と調査員があたり、撮影は翌年の2月17日まで続けられ、入山日数は130日を超えた。ライチョウの映画を撮影するにあたり、昭和35年白馬岳から富士山に移殖されたライチョウの生態調査を、富士山で6月14日から10日間にわたって行った。この調査は当館、信州大学教育学部生態研究グループ、富士国立公園博物館、日本野鳥の会山麓支部のメンバーによって行われ、当初移殖されたのは7羽であったが、調査の結果9羽と2営巣が確認され、撮影にも成功した。
- ライチョウの低地保護増殖事業について、初めて県より委託金の交付を受けライチョウの卵の採卵を行った。

- 12月17日、木崎湖畔の馴致場で飼育されていたコブハクチョウを初めて木崎湖に放鳥し観察を行った。
- 第10回「山の自然科学教室」を大谷原、針ノ木谷、居谷里湿原で実施した。今まで毎年継続して行ってきた自然科学教室も今回が最終のものとなった。また、友の会では「小鳥の声を聞く会」「夏山映画会」を行った。

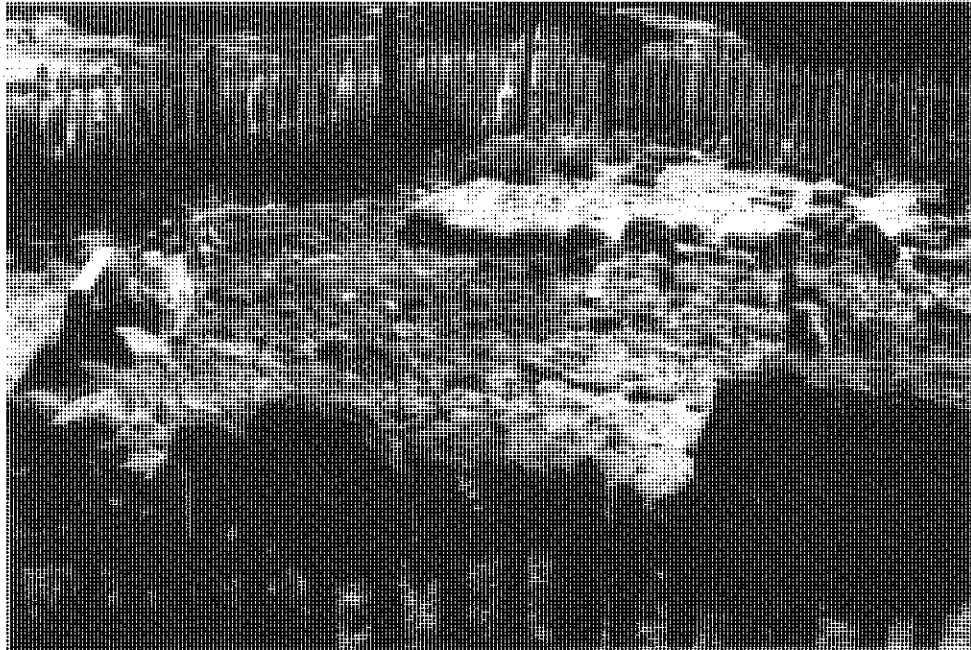
昭和42（1967）年度

- 博物館の宿日直は開館以来職員が交代で行ってきたが、43年より常直職員が配置されることになり、職員による宿直勤務が廃止されるため宿泊施設の整備を行った。
- 動物の飼育展示の充実を計るため、小鳥舎、リス舎各1棟の建設を行った。
- 「田淵行男写真展」を開催し、常設展の随時改修により55年まで大町市の文化祭に参加した。
- カモシカの保護増殖事業に今年度も国庫、県費補助金が交付され、カモシカ3頭の新規保護受け入れ、カモシカ用の乾燥飼料製作舎、放飼場の建設を行った。また、昨年に引き続きライチョウ保護増殖事業については県委託金が交付され事業を行った。
- 特定研究、「生物圏の動態」の研究プロジェクトに参加、「カモシカの二次生産量の測定法」の調査研究を開始し、調査は山岳博物館で飼育中のカモシカを対象に12ヵ月継続して行った。
- 映画『特別天然記念物ライチョウ』は3月26日完成、一般公開を前に関係者多数を招いて試写会が大町東映劇場で行われ好評を博し、16mm縮小版が山岳博物館に寄贈された。また、同年開催されたアジア映画祭に参加しグランプリを受賞した。
- 教育普及活動の一環として、修学旅行の中、高校生からの要望によりライチョウの映画、およびスライドを使用して北アルプスの動植物の紹介を行った。以後も各学校からの要望もあり館内以外での出張上映を引き続き行った。
- 友の会は「小鳥の声を聞く会」を行った。

昭和43（1968）年度

- 施設整備のため事務室の天井部分の改修工事、及び動物園にサル舎1棟の建設を行った。
- ライチョウ保護増殖事業は、低地飼育で解消できなかった気象問題を克服するため、ライチョウの生息現地で飼育を実施することになった。北アルプスの爺ヶ岳に可搬式のライチョウ舎を作り中に家族群を収容して、天然餌と人工餌による栄養の比較、動物性食餌の摂食量などの調査の他、次年度建設を計画しているライチョウ舎の中に取り込む人工気候室のための気象の調査も並行して行った。この調査は6月27日から3ヵ月余にわたって行われ、当館職員、信州大学生物学教室の学生等延370人が従事した。9月18日、第1陣として現地で順調に育った7羽が、24日には残り3羽が爺ヶ岳から下へ移された。本年度もカモシカ、ライチョウ保護増殖事業に国庫、県費補助金が交付された。

- 元来ライチョウが生息していないとされていた、八ヶ岳でライチョウの姿が登山者によって撮影された。当館の職員による生息状況の調査が行われたが、ライチョウの姿を確認することはできなかった。
- 低地で栽培実験が行われていたコマクサは、繁殖に成功し株分けができる状態になった。木曽福島営林署の要請により、木曽御岳にコマクサを復活させるため種子1,000粒と90株を譲渡した。
- 友の会は「小鳥の声を聞く会」を行った。



コマクサの低地栽培実験

昭和44（1969）年度

- 建物の老朽化によりいたるところが破損し、廊下、天井、壁面及び便所の屋根の部分的な補修を行った。また、コマクサ園の外柵も設置され、さらに観光課の協力により本館北側に水洗便所1棟を建設した。
- 飼育中のライチョウが5月18日より産卵を始め自然抱卵し、6月29日2巣から8羽と5羽が孵化に成功した。これは低地での自然抱卵による孵化としては日本で初めての例であったが、その後数日間で殆どが死亡した。またチャボを母鶏として抱卵させていたものが6月22日孵化した。これらの母鶏とヒナは低地での気象条件を克服するため、8月6日、気温の低い標高1450mの扇沢に建設したライチョウ舎に移し、11月5日まで飼育し下山した。また、10月13日、夏期の気象条件に対応するための人工気候室の工事を着工し、12月22日完成、翌年の4月23日に機械部分がセットされ完了した。
- 「中京女子高校」及び「名古屋市立北高校」など7校の要望により自然観察指導ならびに映画スライド会を行った。
- 友の会活動は「小鳥の声を聞く会」を開催した。

昭和45（1970）年度

- 本館の屋根は部分的な補修にもかかわらず、再び各所で雨漏りや、床が破損し危険になってきたため全面的に修繕工事を行うことになったが、予算不足もあり毎年継続して行うことにし、屋根葺き替え、床張り替えの第1次工事を行った。また、館内照明関係を一括制御するための配電盤の整備を行った。
- 展示室が狭くなったため講堂を改修して民俗展示室とした。
- 山岳博物館の老朽化が協議会で取り上げられ、老朽化のほか耐火、耐震、放送設備などの不備が観覧者に不便をかけ、また、貴重な資料の保存上不適切であり、これらの諸問題を解決するためには早急に館を建て直す必要があるとの結論となった。そのため市当局に意見書を協議会から提出することになった。46年3月25日、「市立大町山岳博物館の整備について」の意見書を市当局に提出した。
- 5月29日、カモシカ放飼場で飼育中のあつ子（43年保護）が早朝出産、山岳博物館が昭和31年カモシカの飼育を始めて14年目にして初の繁殖であった。出生したカモシカはオス（後に「太郎」と命名）であった。
- 友の会は「小鳥の声を聞く会」を実施した。また、「自然保護シンポジウム」も開催した。



ニホンカモシカ初繁殖（左より「あつ子」、「太郎」、「大助」）

昭和46（1971）年度

- 先に提出した意見書「市立大町山岳博物館の整備について」は、市当局の財政困難な折、早急に建て直しは無理との見解に、協議会では県あるいは国へ移管の案も協議されたが、それ以前に建物の整備、館内展示等の充実が先であるといった意見が大勢を占めた。
- 第2次の修繕工事の屋根の葺き替え、雨樋の取り付け、また壁の剥落防止のため壁面、天井、床の張り替えの第1次内部補修工事が始まった。
- 資料を鼠害から守るため資料整理戸棚の製作を行い、動物園内の歩道の舗装も行った。
- 山岳室の一室を海外登山室に改修し、海外登山の資料の収集を行うと共にジオラマ室の整備も開始し展示の充実を計った。
- 文化祭には20周年記念特別展として「ツルとサギ展」を開催した。
- 5月22日、大町駅前の水禽舎で飼育されていたオオハクチョウが死亡した。その後再びオオハクチョウの入手はできず、代わりとして「白鳥の池」で飼育されていたコブハクチョウが水禽舎へ移された。
- 扇沢総合案内センターに隣接して作られたカモシカ放飼場でのカモシカの飼育は、関係官庁から許可されなかったが、本年ようやく許可がおり飼育することができるようになった。7月15日、カモシカ1頭を扇沢へ移し展示飼育をし、11月8日再び山岳博物館へ移した。この扇沢カモシカ園へはそれ以来毎年、雪の無い季節にカモシカを移し飼育展示している。

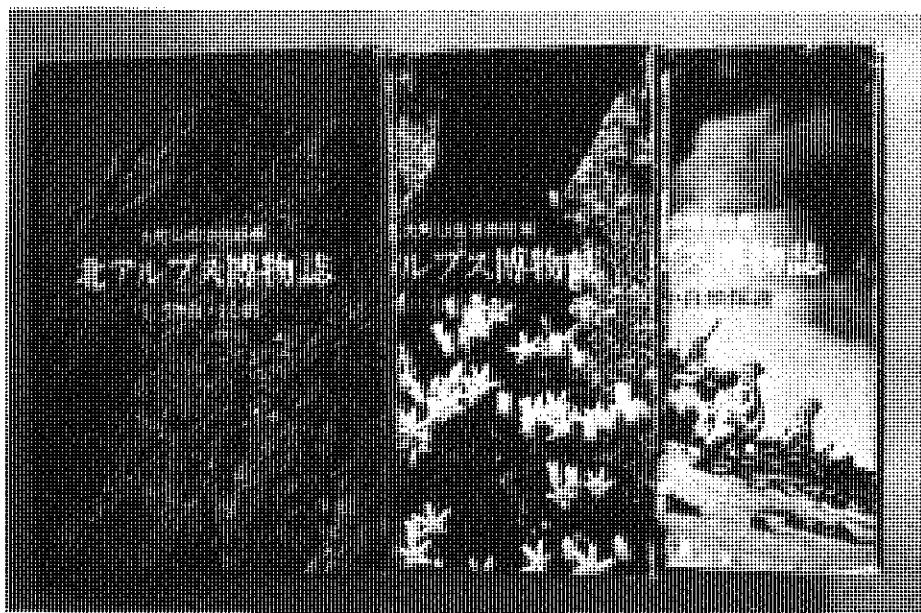
昭和47（1972）年度

- 第2次の壁面、天井の張り替え工事を行った。
- 常駐の住み込み職員のための生活環境整備のため浴槽の設置工事を行った。
- 「成沢薫遺作写真展」のほか、センターケースを製作し、生物室の展示の充実を計った。
- 11月30日、『北アルプス博物誌』第1巻登山・民俗編を、山岳博物館開館20周年記念として出版した。これは31年から月刊紙として発刊されてきた『山と博物館』に掲載されたものの中から、各分野別に分類しまとめたものである。
- 日中国交回復を記念して中国から日本にジャイアントパンダが贈られ、その返礼として日本からカモシカが贈られることになった。窓口は上野動物園があたったが上野動物園にはカモシカがいないため、当館にカモシカ1つがいの提供を協力要請してきた。当館としてはこれに全面協力することになり、候補のカモシカも「木曾生」と「町子」と決まって、12月25日、報道関係等に上野動物園と当館で同時発表を行った。中国への輸送日は48年4月上旬と決まり、検疫の関係もあって3月25日に大町を出発する予定が組まれた。大町から送り出す日を3日後に控えた3月22日、記念撮影のためカモシカ園内に侵入した心無い観覧者に「木曾生」は右目を殴打され失明してしまった。そのため、上野動物園と協議し「木曾生」と「町子」のペアの代わりとして、当館の

繁殖第1号である「太郎」と「辰子」(辰野町で保護)のペアが組まれ贈られることになり、3月25日盛大な歓送会の後上野動物園に移送した。4月3日、上野動物園で検疫を終了したカモシカ「太郎」と「辰子」は大町から参加した助役、教育委員長、館長その他多くの関係者の見送りを受け、日航、全日空の2機の航空機に積み込まれ中国へ旅立った。中国へ渡った「太郎」と「辰子」は北京動物園で繁殖に成功し、子供たちは天津、石家荘、広州などの飼育施設へ分けられている。



中国へ贈られるニホンカモシカ(「太郎」と「辰子」)



『北アルプス博物誌』の発行

昭和48(1973)年度

- 第3次の屋根張り替え工事を行い、屋根の工事は今年で終了した。
- 9月15日～10月28日までの間、無作為に10日間を選び当館への入館者に対する第1次アンケート調査を運営基礎資料とするため行った。その結果、当館への入館者の地域別では関東方面が48.3%、次いで近畿方面21.5%、東海方面13.8%、また、山岳博物館を知ったのは友人知人が最も多く37%、続いて案内書33.5%、マスコミ関係は9.2%で

あった。さらに、希望としては多かったものは、①周囲の風景が素晴らしい、静かな環境を保ってほしい。②日本の登山の歴史に関する資料を充実してほしい。③説明員がほしいなどであった。

- ライチョウ保護増殖事業は国庫、県費補助を得て飼料倉庫、孵卵舎各1棟の建設を行った。
- NHKの「ふるさとの歌まつり」が博物館の前庭で行われ、当館で飼育しているカモシカ「和歌子」も出演した。また、観光課の協力により庭の整地整備を行った。
- 昨年11月に出版した『北アルプス博物誌』の第1巻登山・民俗編に続いて、第2巻植物・地学編、第3巻動物・自然保護編を5月15日出版し、出版記念会を行った。その後、巻によっては5版を重ねたものもある。
- 友の会は「小鳥の声を聞く会」「木崎湖の白鳥を見る会」また児童館と共催で「夏の自然観察会」「いなごとり」が行われた。

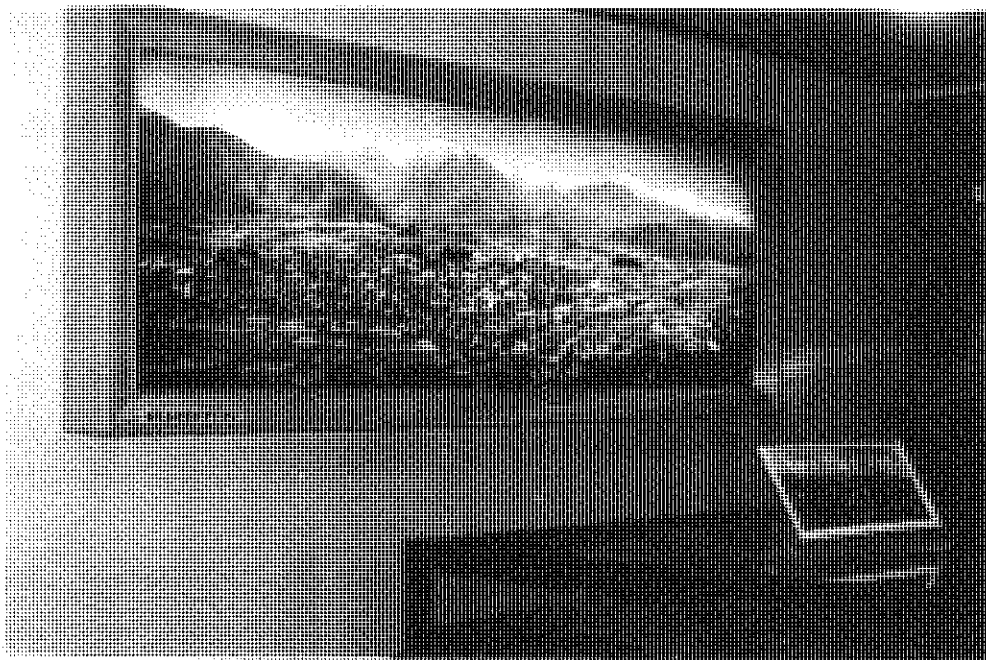
昭和49（1974）年度

- 第3次の展示室の床、天井、ホール床の張り替え工事を行い、漏電警報機も設置した。
- 簡易水道の水源地補修工事を行った。また観光課の協力により動物園の遊歩道の舗装工事を行った。
- 生物室、文化財コーナーの展示替を行った。また山岳博物館からの眺望も雨天時には何も見えないため、観覧者の便に供するため、北は白馬岳から南は燕岳、常念までの大パノラマのコルトンを製作し展示の充実を計った。
- 8月7日から13日までの1週間、入館者に対するアンケート調査を行った。その結果、入館者の動向は昨年と同様に関東方面が最も多く54.0%、次いで近畿方面17.4%、東海方面17.3%の順であった。また山岳博物館を訪れた動機は旅行途中が最も多く62.1%、登山に来てが15.6%。展示で一番印象に残ったのは北アルプスの動植物に関するもの37.3%、登山用具に関するもの20.0%などで、もっと詳しく知りたいものも印象に残ったものと同じ順位であった。
- 山岳博物館の将来の運営に資するため、協議会委員による県内の博物館、資料館の視察研修会がもたれ、職員体制、資料保管状態、教育普及活動などについて研修をした。
- ライチョウ保護増殖事業は国庫、県費補助を得てライチョウ舎1棟を建設したが、冷房装置の据え付けは予算の関係で翌年回しとなった。
- 友の会は児童館と共催で「小鳥の声を聞く会」「児童写生会」「夏の自然観察会」などを行った。

昭和50（1975）年度

- 第4次の廊下の壁の全面的な張り替え工事を行い補修工事は全て終了した。
- 当館が使用していた水道は簡易水道であり、需要の増加と衛生面から上水道を引くための工事を2年計画で開始した。
- 生物室充実のため展示ケースを製作し、鳥類コーナーの展示を行った。

- 8月1日、48年に中国へ贈られたカモシカについてのメッセージが北京動物園から寄せられ、49年にメス1頭の繁殖に成功したと知らせがあった。また9月5日には陳楚駐日大使夫妻が来館し親しくカモシカを見学された。
- 大町駅前に設置の水禽舎は近年交通量が急激に増加し、動物を飼育する環境では無くなり併せて、駅前整備事業が計画されていることなどから、水禽舎の移転について協議会で論議された。移転については経費の問題などのからみもあり、整備計画の中で水禽舎の取り扱いと今後の方向性について、関係課と協議をして進めることになった。
- ライチョウ、カモシカ保護増殖事業は国庫、県費補助を得て放飼場の間仕切り柵、排水工事を行った。またライチョウ飼育事業は飼育舎の冷房装置の設置、ライチョウ舎屋根の防水工事を行った。
- ライチョウ飼育研究担当職員の異動により、ライチョウ保護増殖事業は新しい対応を求められ、プロジェクトチームを編成して対処することになった。構成は職員の他に臨時研究員、松本家畜保健衛生所、前飼育担当などである。
- 友の会は児童館と共催で「小鳥の声を聞く会」「春の自然観察会」「児童写生会」などを行った。

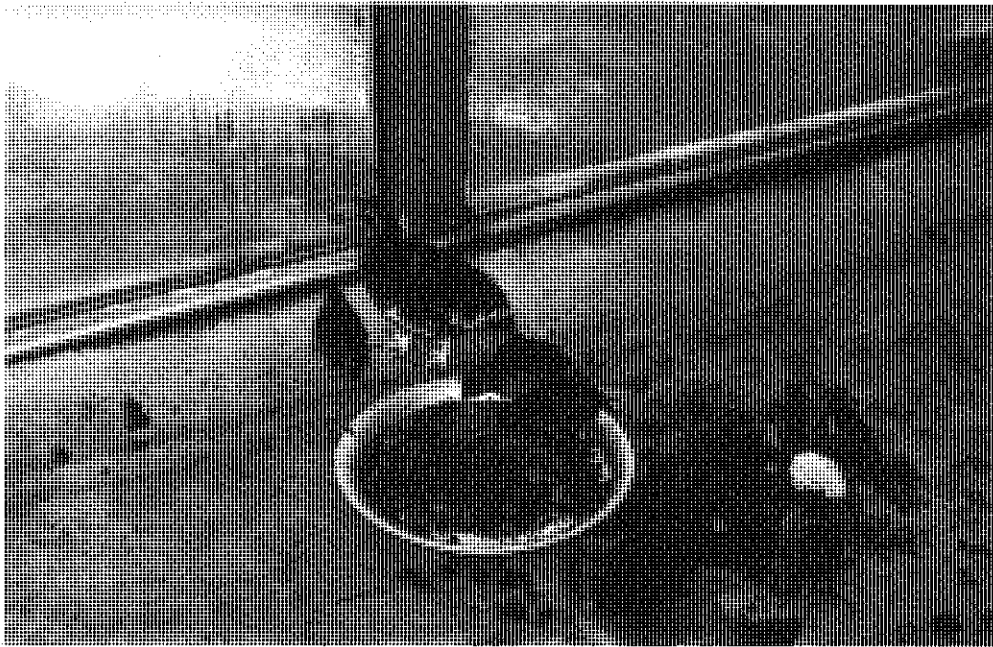


北アルプスと市街地の写真コルトン設置

昭和51（1976）年度

- 施設整備として火災報知機の設置、簡易水道の水源地の整備を行った。
- 昨年に引き続いて上水道の工事を行った。8月6日にポンプアップ試験を行い、12日から供用を開始した。
- ライチョウ保護増殖事業は環境庁の発足に伴い、文化庁から所管替えとなり「特殊鳥類保護補助」と名称が変わった。カモシカ、ライチョウ保護増殖事業は国庫、県費補助を得てカモシカ用餌場5棟、ライチョウ飼育舎1棟の建設を行った。

- 植物展示の強化を計るためコルトンを設置し映像展示を行った。
- 野生鳥獣のうち産業振興との調整の上で、その害性について比較的不明な種について食性調査、生息環境調査を行い被害の防止、害性に対応した措置を策定する調査「鳥獣害性対策調査」が環境庁から委託された。今回の調査対象はカモシカとゴイサギの2種であり、ゴイサギについては長野県以外の調査でもあり、また、野外調査で調査員が不足するためプロジェクトチームを構成し調査を行う方針とした。チームは当館職員その他、東京農業大学、国立科学博物館附属自然教育園、日本鳥類保護連盟、神奈川県立博物館、信州大学の15名のメンバーである。調査は10月から翌年の3月末まで行われ、出勤人員は延466人であった。
- 文化庁から日本自然保護協会が委託され事業の一環として、カモシカの生態を解明する上でのテレメーターの開発があり、当館ではそのうちのテレメーター装着具、電波実験を担当した。この実験も関係者によるプロジェクトチームによって行われた。
- 友の会は児童館と共催で「小鳥の声を聞く会」を行った。



ライチョウ飼育

昭和52（1977）年度

- 施設整備として本館の周囲の外柵設置工事を行った。
- 国立科学博物館より展示ケースを受け入れ、地学、郷土室の展示整備を行った。
- 山岳博物館の初めての具体的な改築計画案が協議会で協議された。計画は鉄筋コンクリート造り、地下1階、地上2階、塔屋付き、延床面積2006㎡で総建設費は478,000,000円である。建設のための財源確保については市当局、議会に強く働きかけ早急に実現に向けて努力をすることになった。
- ライチョウ、カモシカ保護増殖事業は国庫、県費補助の交付を受け、カモシカ緊急保護舎の第1期工事、第2期餌場5棟の建設工事を行い、また、ライチョウ幼鳥舎1棟の建設を行った。

- 昨年に引き続き「鳥獣害性対策調査」のカモシカ的生活史調査を、北アルプスの白沢天狗岳を中心に一年を通じて実施し、延出動日数は100日を超えた。
- 31年から当館で飼育してきたカモシカ「岳子」が5月13日死亡した。
飼育日数は当館としては最長の21年3ヵ月11日であった。
- 友の会は児童館と共催で「小鳥の声を聞く会」を行った。

昭和53（1978）年度

- 施設整備として簡易水道の貯水槽改修工事を行った。
- 展示整備として民俗写真パネルを製作して郷土室の展示充実を計った。
- 博物館の改築については昨年より協議会で検討されてきたが、改築問題は急速に進みいよいよ具体化されることになり、基本構想に基づいて11月末までに仮基本設計をまとめることになる。そのため協議会の中に小委員会を設置して検討をすることになった。8月に「小委員会」設置、9月、小委員会による県内先進地の視察研修、協議会委員全員による県外先進地視察研修。
小委員会での第1次仮設計の討議、10月、事務局による第2次仮設計の討議、11月、第3次仮設計について全員協議会で討議。
12月、東京電力に建設費の協力申し入れを行う。54年1月、国に対する補助金の陳情、2月、県に対する補助金の陳情をそれぞれ行った。
その結果、仮基本設計としては、鉄筋コンクリート造り地下1階、地上2階、一部3階、延面積1955.04㎡、試算の建設費は3,800万円の仮基本設計ができあがり、博物館所有地の測量も行われた。財源については国、県の補助のほか起債および寄附金をあてることになったが、財政的な面から2ヵ年計画で建設を進めることになった。
今年度は次年度の調査を行うにあたっての予備調査が行われ、準備が整った。
- ライチョウ、カモシカ保護増殖事業は国庫、県費補助を得て第2期のカモシカ緊急保護舎建設及び、ライチョウ飼育舎1棟の建設を行った。
- 木崎湖畔の「白鳥の池」で飼育されているコブハクチョウを、観光客の便を計るため木崎湖の流出口の農具川に放鳥する試みを行った。このコブハクチョウの農具川での飼育は川が凍結する12月までで、次年度まで行った。
- 高瀬川電源開発工事が完了し、高瀬・七倉両ダムの湛水開始にともない、これらの周辺地域の環境変化に関する調査が本年度から開始されることになった。この調査については市の東電高瀬ダム対策係との協議により、新たに建設される博物館の資料収集を目的として、調査費は開発事業者側が負担することになり実現した。この「高瀬川流域自然総合追跡調査」は3ヵ年継続して行われることになった。事務局は山岳博物館に置き、調査項目は13項目を実施。当館、各大学、研究機関の調査員によるプロジェクトチームが生まれ第1次調査が実施された。
- ここ数年間活動が停滞していた「友の会」を復活するため、8月12日、学生総会、続いて19日には一般総会が開催され再スタートし、「八方尾根自然観察会」「星を見る会」「キノコ採集会」などを行い、以降、毎年活発な活動が行われてきた。

- 当館の動物飼育係帯刀千仁氏は公務中に倒れ54年3月9日急逝された。



友の会再発足（大町公民館）

昭和54（1979）年度

- 博物館の改築は予定として55、56年の2ヵ年の計画で進めることになり、教育委員会の諮問機関として、協議会委員20名（後に団体選出の委員の交代で26名となる）で構成される「博物館建設推進委員会」が作られ、さらにこのメンバーによる部門別小委員会が設けられ、また、市役所内の関係部署の職員で構成される幹事会が作られた。それぞれの担当部門が独自に作業を進め、それを全体会議で諮ることになった。

9月7日 第1回建設推進委員会

*新博物館の構想について次のような案件を討議した。

- 1) 博物館の性格と機能
- 2) 位置と規模
- 3) 運営費と人員配置
- 4) 展示内容

10月24日 第2回建設推進委員会

*新博物館の運営について、以下のような今日までの運営上の諸問題について討議をした。併せて先進地博物館の視察研修が行われた。

- 1) 収集保管機能
- 2) 展示機能
- 3) 調査研究機能
- 4) 教育普及機能
- 5) 地方博物館と観光地型博物館
- 6) 財政上の問題
- 7) 職員組織

11月2日 県内先進地博物館視察

11月14～15日 県外先進地博物館視察

11月30日 幹事会

12月6日 第3回建設推進委員会

*新博物館の建設位置並びに、建設事業費およびスケジュールについて討議をした。

12月～1月 建設予定地2箇所についてボーリング調査を実施し、建設地の測量も行った。

1月20日 第4回建設推進委員会

* 博物館建設位置について討議がされ、建設予定地のボーリング調査の結果が報告された。

* 建物基本計画、園地基本計画、展示基本計画、資金などについても討議をした。

1月30日 「敷地の候補地について」の答申書が推進委員会から教育委員会に提出された。

3月8日 第5回建設推進委員会

* 新館建設構想について協議を行った。

3月28日 第6回建設推進委員会

* 「館建築等の構想に関する事項」についての答申書が推進委員会から教育委員会に提出された。

3月 建築設計業者選定委員会

3月 展示設計業者決定

○ライチョウ、カモシカ保護増殖事業は国庫、県費補助を得て、ライチョウ用簡易飼育舎1棟の建設を行った。カモシカの植林地における食害防止方法の実験の一つとして、カモシカの忌避植物をいろいろな形で植え込み、植林木の被害をいかに少なくするかの実験を行った。

○「高瀬川流域自然総合追跡調査」を昨年度に続いて行い、出勤日数は103日、延454人の調査員が参加した。

昭和55（1980）年度

○博物館の改築にあたり「登山史研究会」が囑託員を中心に組織され、新展示のため登山史の調査研究、資料収集が進められた。

○新館は全ての展示が改められるため、展示研究プランと資料収集を目的に民俗、歴史、考古、動物、植物、登山、地学、美術、展示光学の分野を含む「展示研究会」を組織した。

7月20日、第1回展示研究会を開催し、以後部門別に11回にわたって開いた。

○新館が建設される年度を迎え建設推進委員会も最後のつめの時期を迎えた。

4月 第1回幹事会

4月9日 第1回建設推進委員会

* 昨年度末に3社から提出を受けた基本設計を基に協議が行われた。特に展示室、収蔵庫のスペースについて論議がなされた。また、建設財源としては約4億6,000万円が見込まれ、本体工事は55、56年の2ヵ年で、展示は57年とする線にほぼ固まった。

5月 建設設計業者決定

5月 55年度起債申請

5月 建築物基本設計完了

5月20日 第2回建設推進委員会

*エレベーター位置およびホール、階段などの設置について協議をした。

6月18日 新館建設予定地内にあるタヌキ、アナグマ、イヌワシ舎などの動物舎の移転工事が開始され、7月30日に全ての動物舎の移転が完了した。

7月 建築実施設計完了

7月28日 建設業者選定委員会

8月1日 第3回建設推進委員会

*実施設計に基づく検討が行われた。また、展示については展示業者より提出された第1次素案および展示進行スケジュールについて論議した。各スペース別素案の項目は次のようであった。

○第1展示室 1. 山と自然 1) 北アルプスの生い立ち 2) 山の生物
2. 山と登山 1) 登山史

○第2展示室 1. 山麓の自然
2. 郷土の生活と文化

○特別展示室 1. パンダとカモシカ

○玄関ホール 1. 北アルプスに関する美術品

○休息室 1. 岩場模型と技術体験コーナー

○展望室 1. 地模型と観光望遠鏡

○正面 玄関 1. カモシカのブロンズ像

8月20日 建設関係入札

9月8日 起工式が行われ新館建設がスタートした。

9月24日 第4回建設推進委員会

*屋根および外壁のタイルの色について検討が行われ、その結果先進地博物館を視察し参考にする方向となった。また、食害地で捕獲したカモシカの収容を目的としたカモシカ放飼場の建設についても協議した。

10月2日 県外博物館視察研修

12月9日 第5回建設推進委員会

*展示研究会、登山史研究会は、その調査、研究結果を盛り込んだ展示基本設計について、展示担当業者を交えて検討をした。

○ライチョウ、カモシカ保護増殖事業は国庫、県費の補助金を得て爺ヶ岳でライチョウの分布、生息個体数、営巣地、産卵状況の調査、カモシカ放飼場3区画の建設を行った。

○「高瀬川流域自然総合追跡調査」は最終年度を迎え、12月12日には事業委託者である東京電力の本社において各調査についての概要報告会が催された。本年度の調査日数104日、調査出動延人員368人であった。

昭和56（1981）年度

- ライチョウ、カモシカ保護増殖事業は国庫、県費補助を得て、ライチョウ飼育舎1棟、カモシカ保護事業は放飼場7区画、飼料倉庫、給排水施設の建設を行った。
- 10月24日、第5回国立公園大会において環境庁長官感謝状を受けた。
- 新館の建設は順調に進み、5月11日、1階部分コンクリート打ちこみ、6月8日、2階部分コンクリート打ちこみを行い、この間に市議会の総務文教委員による建設状況の視察なども行った。
 - 4月14日 展示設計業者と展示研究会との合同会議
 - 5月 56年度起債申請
 - 5月 56年度社会教育施設整備補助金申請
 - 5月29日 第1回建設推進委員会
 - *新館の建物色彩、その他工事の一部設計変更について討議をした。
 - 6月 展示実施設計完了
 - 7月12日 展示小委員会
 - *展示実施設計について討議
 - 7月14日 第2回建設推進委員会
 - *展示実施設計について討議
 - 7月31日 第3回建設推進委員会
 - *壁面レリーフについて討議
 - 9月29日 第4回建設推進委員会
 - *工事の進捗状況と現場視察
 - 10月 展示作成助成金決定（国立公園協会）
 - 10月 道路付けかえ工事
 - 11月25日 第1回協議会
 - *新館のオープンを控えて、山岳博物館条例、規則、入館料の改正について協議をした。
 - *工事手直し部分について討議
 - 11月28日 新館引き渡し式
 - 2月2日～2月21日 旧館からの引越しを行った。この引越しには職員をはじめ多くの友の会の会員が参加して朝早くから夕方遅くまで行われ無事完了した。
- 4月14日に第1回展示研究会が開催されたのを皮きりに、部門別に以後32回にわたって開かれた。
- 日中国交回復記念として日本に贈られたジャイアントパンダ「ランラン」が死亡し剥製が東京都多摩動物公園に保管されていた。日本からの親善動物として当館で飼育されていたカモシカが中国に贈られたという経緯などから、「ランラン」の剥製を当館に寄託してほしいとの陳情書が東京都に提出されたが、諸般の事情で実現はかなわなかった。しかし、これらの実績から貸し出しには最優先でということになって、「ラン

ラン」の一般公開第1号として当館で「パンダとカモシカ展」を4月22日から5月5日まで開催した。観覧者は多い日には5,000人を超え、期間中の入場者数は有料無料合わせて30,367人の盛況であった。



ジャイアントパンダ「ランラン」のはく製展示

昭和57（1982）年度

○新館へのケースなどの重量物の移転は、5月6日専門業者によって開始された。

5月10日 展示作業開始

5月13日、新館への移転が完了するとともに、同日から旧館の取り壊しが行われた。

旧館の跡地は当分の間駐車スペースとして活用することとした。

5月31日 竣工引き取り

6月5日 落成式を多くの関係者の参列により行った。

○新館の開館を記念して6月5日～13日まで特別展「山岳博物館の歩み展」を開催した。

また、それ以外に「畦地梅太郎山岳版画展」

「信濃美術館移動展」「キノコと秋の草花展」

「灯火の歴史展」を開催した。

○ライチョウの保護増殖事業は国庫、県費の補助を得て、飼育研究を継続しながら中央アルプス駒ヶ岳でライチョウの生息環境調査を行った。この調査は当館と東京農業大学とのプロジェクトチームによって、7月と8月の2回にわたって延100人の調査員によった。

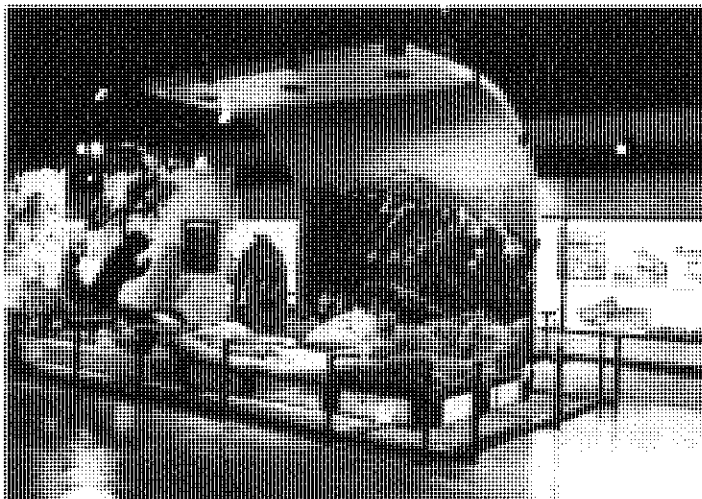
○カモシカ保護事業は捕獲カモシカの収容、また、11月20日、繁殖用貸し出しとして東京都多摩動物公園へカモシカ1頭(オス・「高雄」)を移し、現地において繁殖に成功している。



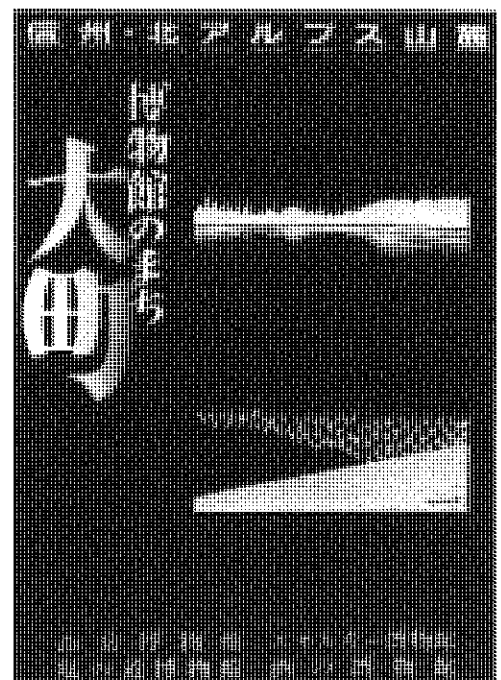
三代目博物館開館

昭和58（1983）年度

- 博物館としては初めて、PR用にチラシ（B5判）を製作した。
- 博物館の職員の専門分野以外の分野をカバーするため、民俗、美術、歴史、山岳、考古、地学、動物の各分野について「嘱託員会」を組織した。
- 企画展は「松崎和紙展」「春の草花と山菜展」「奥田郁太郎展」「キノコと秋の草花展」「日本山岳写真協会展」「大町美術会展」「大町の遺跡展」「創元展」を開催した。
- ライチョウ保護増殖事業は飼育研究を進めながら、生息環境調査を進めた。調査は昨年と同じでプロジェクトチームによって八ヶ岳で8月と9月の2回実施し、出勤人員は延90人であった。
- 3月2日、「カモシカ会議」でオーストリア、インスブルック市のアルペン動物園がカモシカの入手を希望していることが明らかにされ、大町市の関係者によって、カモシカを贈呈することと同時に姉妹都市問題も含めて研究に入り、贈呈するカモシカとして「大」と「博美」が候補となった。
また、この問題については日本動物園水族館協会の小森厚事務局長より、直接アルペン動物園と連絡をとるよう要請された。
- 大町市内の博物館で構成される「大町博物館連絡会」が作られ、初代幹事館は山岳博物館で、合同事業として「研修会」「博物館巡り案内図」の製作、6館による入館者の動向などを知るためのアンケート調査などが実施され現在に至っている。



改修した1階展示室



大町博物館連絡会のポスター

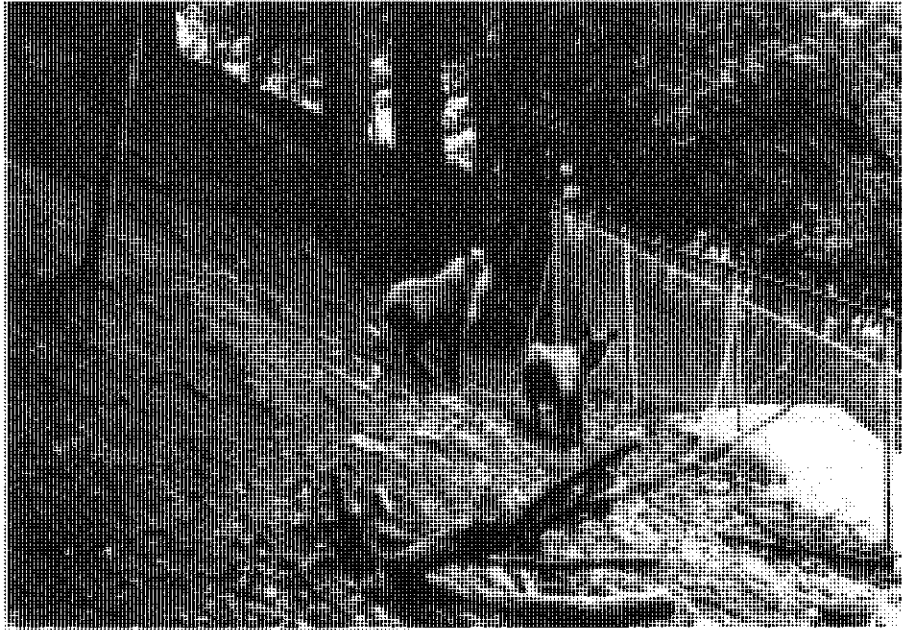
昭和59（1984）年度

- 昭和60年2月18日にインスブルック市、アルペン動物園のワイヤーブルグ宮殿において、インスブルック市、アルペン動物園、大町市、大町山岳博物館の代表者4名による友好提携協定書への調印を行った。
- 企画展は「千国街道自然と文化展」「春の草花と山菜展」「日本山岳画協会展」「日本山岳写真協会上田支部展」「パレット会展」「秋の草花とキノコ展」「野の花山の花写真展」「創元展」「古墳墓展」を開催した。
- ライチョウ保護増殖事業は国庫、県費の補助を得て飼育研究を継続しながら、昨年と同じハヶ岳北部で、同じプロジェクトチームによって生息環境調査を8月と10月に行い、出勤人員は延176人であった。
- 友好提携を記念し、ニホンカモシカとアルプスマーモットの動物交換をした。
 - 4月5日 アルペン動物園よりの文書では、カモシカはウィーンの世界最古の近代的動物園であるシェンブルン動物園に收容されるとのことであった。カモシカがアルペン動物園でなくシェンブルン動物園に收容されるのは、アルペン動物園はヨーロッパ産の動物だけを、国際的な動物はウィーンの動物園でとのオーストリア側の申し合わせがあったからである。
 - 5月6日 日本動物園水族館協会の小森事務局長が来館され、市関係者とカモシカの贈呈に係る輸送、検疫、姉妹都市等の問題について打ち合わせを行った。また、交換動物はアルプス・マーモットと決まった。
 - 5月23日 カモシカの贈呈等についてオーストリア政府観光局が、大町市とインスブルック市との連絡などについて協力するとの連絡が入った。
 - 6月20日 カモシカの輸出検疫は成田空港天浪検疫所に決定。
 - 8月29日 カモシカ輸送、友好提携協定書等について、オーストリア政府観光局、小森事務局長、大町市関係者との打ち合わせ会を行った。
 - 8月31日 アルペン動物園よりメッセージが届き、カモシカの贈呈と友好提携が本決まりとなり、輸送時期は10月下旬から11月上旬、友好提携調印は60年2月頃と公式発表した。
 - 9月25～28日 松本家畜保健衛生所によりカモシカの血液採取、ブルセラとツベルクリン反応の事前検疫を行った。
 - 9月27日 オーストリア大使館に協力要請を行った。
 - 10月23日 カモシカ輸送業者が阪急交通社に決定
 - 10月26日 カモシカ2頭の歓送会が行われ、1週間の検疫のため成田空港天浪検疫所に向かった。
 - 10月31日 カモシカ輸送と友好提携の事前打ち合わせのため、館長がインスブルックへ向かった。
 - 11月1日 アルペン動物園において友好提携と、アルプス・マーモット受け入れのための飼育舎建設について打ち合わせを行った。

- 11月5日 検疫が終了すると共に、2頭のカモシカは空路インスブルックへ運ばれるため成田空港を出発したが、翌6日中継地であるフランクフルト空港でメスの「博美」が死亡していることがわかった。
- 11月29日 アルプス・マーモット受け入れのため飼育舎建設について打ち合わせ会を持った。
- 12月11日 協議会で死亡した「博美」に代わるカモシカの贈呈と選定について協議がされた結果、「博美」の妹である「博子」が候補として決まった。
- 12月25日 市の関係部局と博物館職員によるプロジェクトが生まれ、友好提携、カモシカ輸送について討議した。
- 1月14日 「博子」の事前検疫を松本家畜保健衛生所によって行った。
- 1月18日 友好提携のための事前調査にインスブルック市のプランク議長とオーストリア政府観光局の柴田彩子氏が来市した。
- 2月5日 「博子」の歓送会を行った。
- 2月7日 1週間の検疫を受けるため成田空港天浪検疫所に向かった。
- 2月14日 カモシカ贈呈と友好提携協定書への調印のため、市長、議長ら8名がインスブルックへ向かった。
- 2月15日 カモシカは成田空港より北周りでウィーンへ輸送され、16日ウィーンのシェンブルン動物園に収容された。
- 2月18日 友好提携協定書への調印を行った。
- 2月27日 アルプス・マーモット舎着工、3月末完工
- 3月2日 アルプス・マーモット受け入れに係るプロジェクト会議を持った。



インスブルック市と大町市、アルペン動物園と大町山岳博物館との友好提携調印



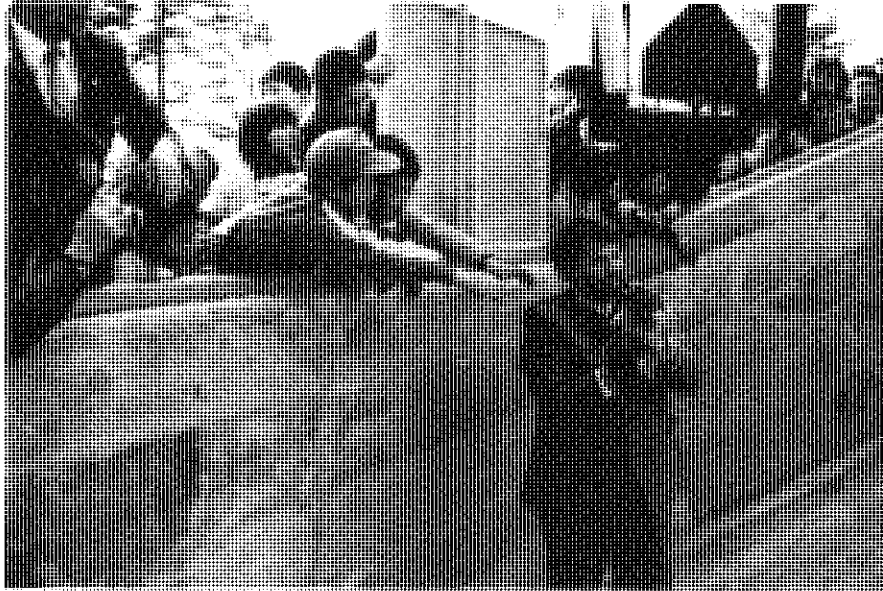
オーストリアへ送られたニホンカモシカ「大」(左)と「博美」

昭和60 (1985) 年度

- 大型の山岳地模型 (3,600×2,830mm) が北陸地方建設局大町ダム管理事務所から寄託され、3階の展望室に設置した。展望室からの北アルプスの眺望と合わせ見ることができ、観覧者には好評である。
- 企画展は「チロル展」「春の草花と山菜展」「日本水彩画会長野展」「秋の草花とキノコ展」「大町美術会展」「信州の化石展」「信州の動物写真展」講演会「チロルの小動物を守る」が行われた。
- ライチョウ保護増殖事業は国庫、県費補助を得て、ライチョウ舎1棟の建設が行われた。
- 友好提携をしたアルペン動物園からアルプスマーモット (オス2頭・メス2頭) が贈られてくることになった。
 - 4月3日 アルプス・マーモット受け入れに係るプロジェクト会議を持った。
 - 4月23日 アルプス・マーモットが成田空港に到着し、マーモットはテレビ出演のため東京都内の動物商へ一時預けられ、26日のフジテレビ「なるほど!ザ・ワールド」に出演した。
 - 4月27日 アルプス・マーモットは大町に輸送され、山岳博物館のマーモット舎前で歓迎式を行い、アルペン動物園からはアロイス・ルッガー会長、ヘルムート・ペヒラーナー動物園長、ペーター・モラス、ペーター・ステルン技師が参加した。
 - 8月7日 マーモット1頭死亡
 - 9月26日 ペヒラーナー園長より申し入れのあった、オオライチョウの受け入れを公式発表。
 - 2月12日 オオライチョウ舎着工 2月末完工

3月24日 成田空港に到着したオオライチョウ1つがいを引き取る。陸路輸送中にメスが死亡した。

3月25日 オオライチョウ舎前で歓迎式が行われた。アルペン動物園側の出席者はゲオルグ・ランプ観光局長、ヘルマン・クノル市議会議員である。



アルプスマーモット入園



オオライチョウ歓迎式

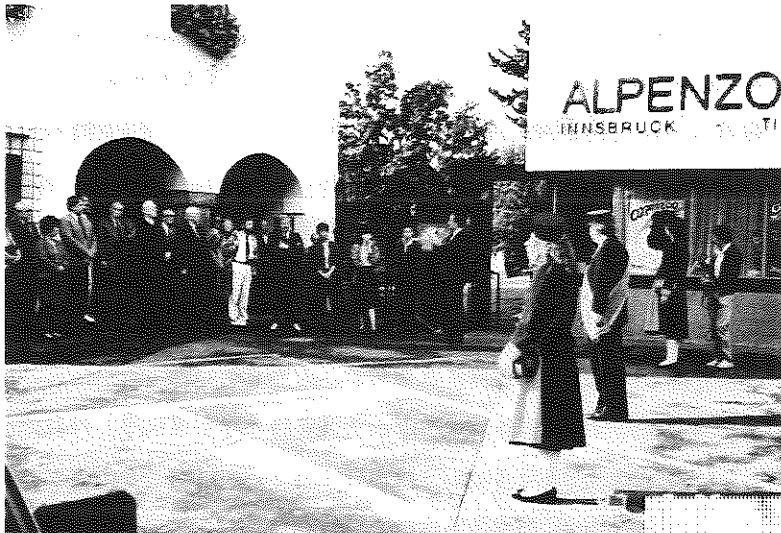
昭和61（1986）年度

- 冬季に白馬村で開催されるスキー国体の開会式にご出席される浩宮様が、その折に山岳博物館においでになる予定となり山岳関係の展示替えを行った。しかし、来館直前に高松宮様のご逝去され中止となった。
- 企画展は「信州の動物写真展」「春の草花と山菜展」「写真展－槍ヶ岳讃歌」「日本水彩画会長野大町展」「山岳写真家－田淵行男の世界」「秋の草花とキノコ展」「大町美術会展」「国立公園写真展」を催した。

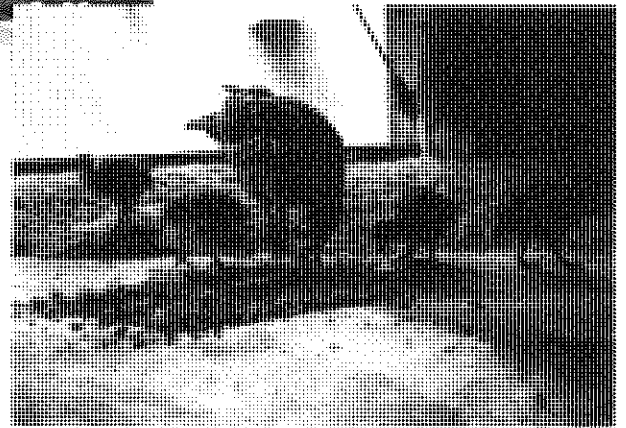
- ライチョウ保護増殖事業は国庫、県費補助を得て、ライチョウ舎1棟の建設工事を行った。
- オオライチョウのメスの死亡は既にアルペン動物園に知らされており、5月11日から日本で開催される国際カモシカシンポジウムに参加するペヒラーナー・アルペン動物園長がオオライチョウの卵を持参した。しかし、この卵からの孵化は不成功に終わった。

昭和62（1987）年度

- 山岳博物館が友好提携をしている、インスブルック市アルペン動物園の開設25周年の記念行事に招待を受け、山岳博物館友の会の会員を中心に民間の人々の参加を募り、記念行事に参加した。この訪問団には大町市長、市内の関係小・中学校からそれぞれメッセージが託された。9月22日にワイヤーブルグ宮殿で開催された25周年記念行事に参加した。
- 友好提携3周年を記念してインスブルック市と共催で「チロルの動物写真展」「インスブルック市・大町市児童画展」を開催した。そのほかに「春の草花と山菜展」「動物写生画展」「不破章水彩画展」「秋の草花とキノコ展」「大町美術会展」「日本山岳写真協会展」「尾竹正躬展」、講演会「世界のライチョウ」を開催した。
- 2月14日にヒマラヤのチョモランマ／サガルマタ（エベレスト）に、日本、中国、ネパールの3国合同登山隊が登頂を試みるようになった。これを記念して特別展を企画した。そのため職員と顧問、嘱託員による「ヒマラヤ展実行委員会」を開催した。
 - 3月19日 日本山岳会会員を含めた「ヒマラヤ展企画委員会」を組織し、展示プラン、スケジュールについて討議を行い、展示構成は3部で行うことになった。
 - 第1部 日本登山隊8000m峰登頂
 - 第2部 チョモランマ／サガルマタ三国合同登山
 - 第3部 チョモランマ／サガルマタ三国合同登山・テレビ生中継放映成功記念講演会
- ライチョウ保護増殖事業は国庫、県費補助を得て飼育研究を継続すると共に、人工飼料の開発を目的として、ライチョウの飼料の乾燥物消化率、繊維消化率、代謝エネルギーおよび窒素利用率を求める調査研究を行った。
- 昨年のおオライチョウの卵の孵化が不成功に終わったため、本年もアルペン動物園のペヒラーナー園長の好意により再び孵化を試みるようになった。5月5日にオオライチョウ卵受け入れ式が行われ、ペヒラーナー動物園長夫妻、ハンス・アッシュエンブレナー博士夫妻が出席した。また、この折ライチョウ飼育研究プロジェクトチームと、飼育技術の検討会を持った。今回の孵化にはライチョウの専門家であるドイツのアッシュエンブレナー博士が孵化作業についての様々な指導を行い、9個の卵から4羽の雛の誕生を見た。



アルペン動物園開設25周年行事に参列



オオライチョウ孵化成功

昭和63（1988）年度

○5月5日、ヒマラヤのチョモランマ／サガルマタ（エベレスト）に、日本・中国・ネパールの3国合同登山隊が登頂に成功した。山岳博物館の夏の特別展で「ヒマラヤー8000m峰と日本登山隊」の計画を進めた。

4月15日 日本山岳会、日本山岳協会、読売新聞社、日本テレビ放送網に後援依頼を申請し承諾が得られた。

5月21日 ヒマラヤ展企画委員会が開催され、展示実施案が検討され、資料収集活動に入った。

7月16日 「ヒマラヤー8000m峰と日本登山隊」のオープン・セレモニーが行われた。

ヒマラヤ展の開催により各登山隊から借用展示した資料の多くが寄贈され、山岳コーナーの展示が充実した。

これらの他、「春の草花と山菜展」「動物写生画展」「写真展—北ア山麓 季節の詩」「写真展—燕岳花嶺」「秋の草花とキノコ展」「大町美術会展」「信州近代版画の歩み展」「アムンゼンと極地探検」を開催した。

○ライチョウ保護増殖事業は国庫、県費の補助を得て、飼育研究を行いながら、低脂肪、低蛋白の餌を主要成分としたライチョウに適した飼料の成分組織の調査研究を行った。

○カモシカが植林地の植林幼齢木を食害するため、大町市でも被害を防ぐため生体捕獲を実施し、4頭を捕獲しカモシカ園に収容した。



ヒマラヤ展

平成元（1989）年度

- 3月、以前から処遇が問題となっていた山岳博物館の職員の格付けについて、山岳博物館協議会より市長及び教育委員会宛に「山岳博物館職員の格付け見直しについての意見書」が提出された。
- 「町づくり特別対策事業」の一環として付属園の整備を計画した。この事業を進めるため協議会委員と嘱託員で構成される「付属園整備・展示改修小委員会」を構成し検討会を行った。
- 企画展は「世界の山ー風見武秀山岳写真展」「春の草花と山菜展」「雪形祭」「動物写生画展」「日本板画院長野支部版画展」「日本山岳画協会大町特別展」「秋の草花とキノコ展」「大町美術会展」「信濃木崎夏期大学の歩み展」を開催した。
- ライチョウ保護増殖事業は国庫、県費補助を得て飼育研究を継続して行い、飼料の乾物消化率・維持消化率・代謝エネルギー・窒素利用率を求める調査を行った。
- 大町市と友好提携をしているインスブルック市、アルペン動物園の開設25周年記念行事に参加した友好訪問団に、アルペン動物園より山岳博物館にシャモア（アルプスカモシカ）2頭（オス1、メス1）の贈呈書が託された。これを受けてシャモアの受け入れ計画を進めた。
 - 7月1日 シャモア舎建設について指導のため、ペーター・モラス氏来館
 - 7月20日 動物の輸入に関する届出書を動物検疫所長に提出
 - 9月22日 シャモア輸入、輸送業者決定 阪急交通社
 - 10月24日 シャモア舎建設工事着工
 - 12月25日 シャモア舎完工
 - 1月9日 検疫について成田動物検疫所と打ち合わせ

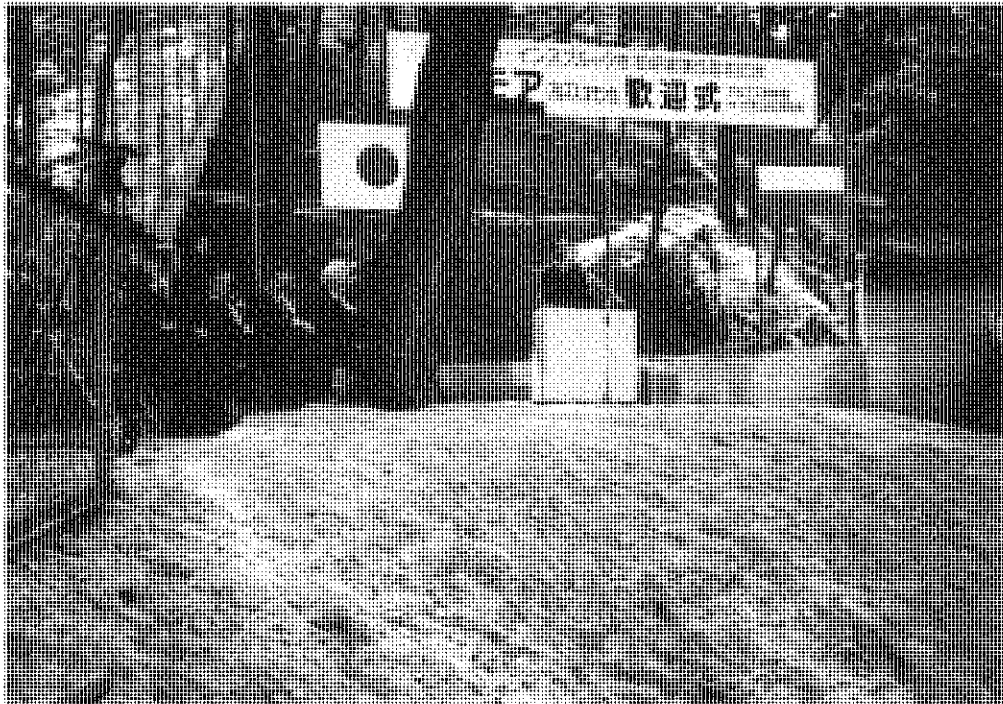
1月10日 シャモア輸入日、輸入頭数（オス1・メス2）決定

1月31日 シャモア成田空港着 天浪検疫所に収容

3月7日 シャモア検疫終了（35日間）

3月9日 シャモア歓迎式

歓迎式にはアルペン動物園側からルッガー会長、ラインハルド・ノイマイヤー動物園友の会会長、ウィルヘルム・グルーバー技師、ほかオーストリア側関係者7名が参加した。



シャモアの歓迎式

平成2（1990）年度

- 「町づくり特別対策事業」の一環として、付属園の整備工事を着手した。この事業は2ヶ年計画で行われる事になった。
- 企画展は「アルプスの山－伊藤正一山岳写真展」「春の草花と山菜展」「雪形祭」「動物写生画展」「巨匠が描いた国立公園50景展」「信濃文化セミナー」「大町美術会展」「秋の草花とキノコ展」「写真展－安曇野鳥景色」「信州ゆかりの水彩画展」を催した。
- ライチョウ保護増殖事業については零細補助金は打ち切るという国の方針で、今年度より総額400万円の事業計画を組むことになった。飼育研究を継続すると共に精製飼料を用いライチョウの蛋白要求量の調査研究を行った。また、緊急収容の事態に備え20㎡のケージ構造の飼育舎1棟を建設した。
- 本年も生体捕獲カモシカの収容を行った。
- 3月にアルペン動物園から贈られたシャモアは飼育舎で馴致飼育が行われていたが、1頭のメスが5月29日、続いて6月28日にはもう1頭のメスも死亡した。
繁殖を計るため国内でシャモアの飼育をしている日本カモシカセンターから導入を計り、11月9日メス1頭を導入した。

平成3（1991）年度

- 山岳博物館開館40周年記念事業として、11月1日に山岳博物館講堂で記念式典を、記念祝賀会を黒部観光ホテルにて執り行った。インスブルック市アルペン動物園のルッカー会長、ペヒラーナ園長らが式典に参列した。
- 40周年の記念出版事業として『大町山岳博物館40年の歩み』、信濃毎日新聞社発行『カモシカ』『ライチョウ』を出版した。
- 皇族のご来館として、10月11日に秋篠宮殿下がお見えになった。
- 11月13日にエベレスト初登頂者であるエドモンド・ヒラリー氏が来館した。
- 駐車場の公衆トイレ工事に着手し、7月30日から共用を開始した。
- 企画展は「燕岳と安曇野ー赤沼淳夫写真展ー」「春の草花と山菜展」「動物写生画展」「雪形祭」「宮崎学動物写真展」「大町美術会展」「秋の草花とキノコ展」「山岳博物館40年の歩み展」が催された。
- ライチョウの飼育で死亡個体からロイコキチトゾーン（原虫の一種）症が初めて認められた。また、平成2年度に引き続き、ライチョウ緊急隔離舎（約20㎡）を建設した。
- アルペン動物園からの贈呈のシベリアオオヤマネコ受け入れ準備として飼育舎の工事を行い、10月30日にオス1頭、メス1頭の贈呈を受ける。個体の繁殖地はオーストリアのアルペン動物園とドイツのハーゲンベック動物園である。



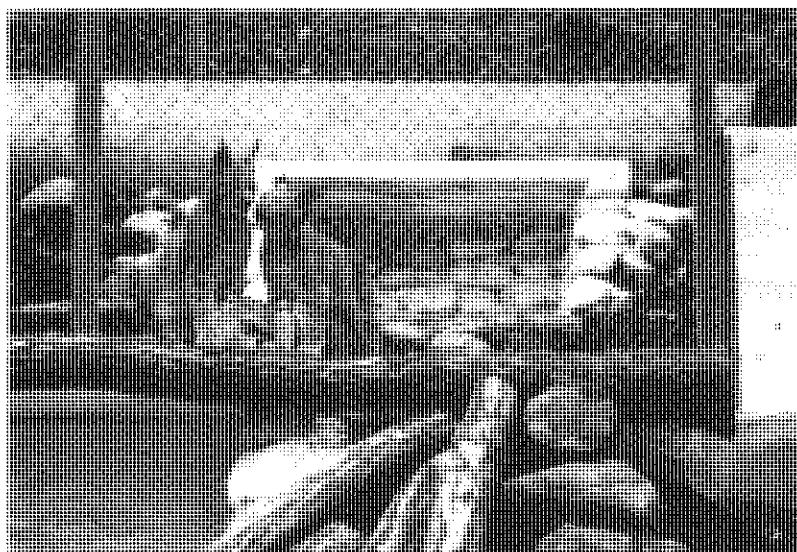
大町山岳博物館開館40周年記念式典



秋篠宮文仁親王ご来館



エドモンド・ヒラリー氏



シベリアオオヤマネコ入園

平成4（1992）年度

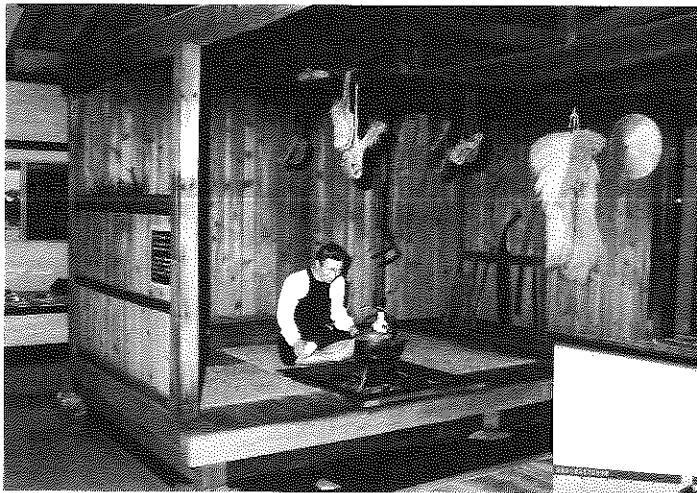
- 皇族のご来館として、9月7日に紀宮清子内親王、9月16日に皇太子殿下（徳仁親王）がお見えになった。
- 9月22日にオーストリアのインスブルック市アルペン動物園の開園30周年記念式典に助役、市会議員副議長をはじめとした大町市の訪問団8名が参列した。
- 博物館内に設置されていた公衆電話をカード式電話に切り替えた。
- 企画展は「時の風物詩－川口邦雄写真展－」「春の草花と山菜展」「雪形祭」「藤江幾太郎ネパール油絵展」「大町美術会展」「秋の草花とキノコ展」「信州版画展」を催した。
- 展示改修の入札で6月19日に丹青社に決定し、1月4日から2月28日まで休館にして展示作業をし、3月2日にオープンした
- 日本カモシカセンターから導入したシャモアが5月9日にメスの子を出産した。



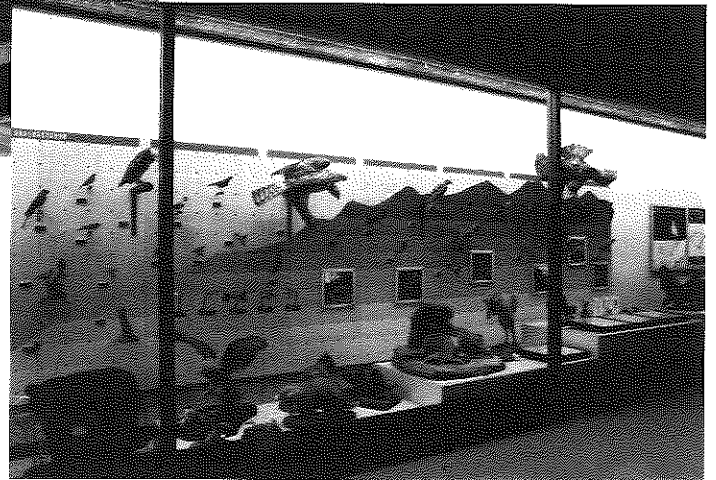
皇太子殿下（徳仁親王）ご来館



紀宮清子内親王ご来館



1階展示室



2階展示室

平成5（1993）年度

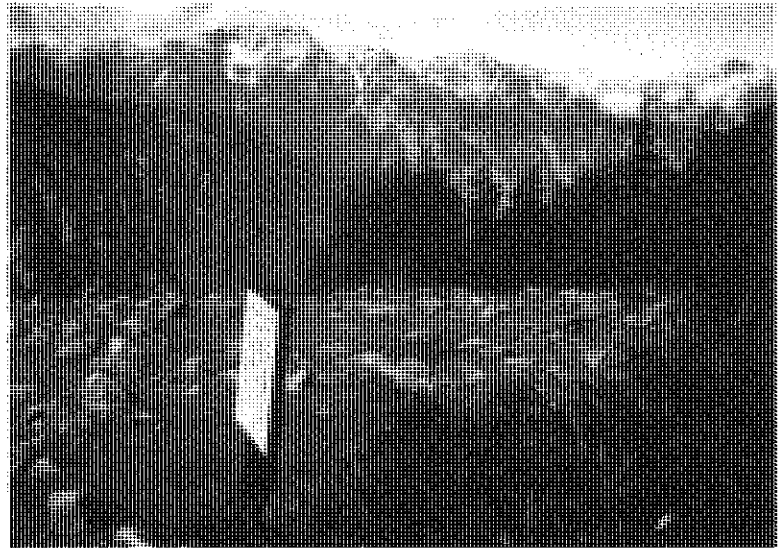
- 4月から編集を進めてきた『博物館総合案内書』が日本生命財団より3,000部を寄贈され、2月24日に贈呈式が行われた。
- 企画展は「穂苅貞雄山岳写真展－梓川・季節の流れの中で－」「春の草花と山菜展」「大町美術会展」「動物写生画展」「齋藤清展」「秋の草花とキノコ展」「黒部溪谷－その人跡と自然にふれて－」を催した。
- ニホンカモシカをオーストリアのシェンブルーン動物園へ贈呈する計画であったが、山岳博物館に適した個体がないため、日本カモシカセンターより5月23日に横浜検疫所へ搬出し、6月2日にオーストリアへ空輸された。
7月4日に市長、館長ほか市民が参加した海外視察団の参列で贈呈式が同園で行われた。
- ライチョウの卵8個を蓮華岳にて採取し8羽が孵化し7月から9月に3羽が死亡した。また、注意標識の看板を五龍岳から槍ヶ岳の山小屋とテント場に設置した。
飼育ではナラの葉ミールの粒度がライチョウによる栄養素の利用におよぼす影響調査を行った。
- 10月15日に海ノ口地籍にて大町市では初めてのハクビシン（死体）を記録した。
- 6月3日に北信越博物館協議会の総会が山岳博物館にて開催された。



博物館総合案内書

平成6（1994）年度

- 企画展は「水越武写真展－日本の原生林－」「春の草花と山菜展」「動物写生画展」「市制40周年記念－日本山岳画協会展－」「日本板画院長野支部展」「秋の草花とキノコ展」「フォッサマグナ展」を催した。
- 5月6日早川組倉庫を借りて保管していた民俗資料を常盤公民館倉庫に移動した。
- コマクサ園の土の入れ替え、高山植物の補植を行った。
- 喫茶売店コーナーを設置のため2階ホールにおいて6月2日から工事を開始し、6月29日に竣工した。7月1日からは友の会の営業により「喫茶売店こまくさ」がオープンした。
- 6月15日からニホンカモシカ体重変化研究を日本獣医畜産大学と東京農工大学との共同で開始した。
- 7月12日に平葛温泉周辺でニホンイヌワシが保護され収容された。体力を回復させ7月30日に日本イヌワシ研究会と合同で放鳥したが翼を骨折した。治療後の放鳥では時期を逸することから山岳博物館に飼育施設を建設し飼育することになった。
- ライチョウ保護事業では注意標識の看板を爺ヶ岳等の山小屋とテント場に設置した。
- 10月29日にアルプスマーモットをインスブルック市アルペン動物園より受け入れた。



ライチョウ保護の標識とロープ（鹿島槍ヶ岳テント場）

平成7（1995）年度

- 企画展は「古幡和敬写真展－岳をめぐりて－」、「春の草花と山菜展」「フォトサークル風の詩の会写真展－花と光と風達よ－」、「動物写生画展」「小林政紘－山の花展」「北アルプス讃歌－日本山岳写真協会松本支部展－」「秋の草花とキノコ展」「山川勇一郎スケッチ展」が催された。
- イヌワシ舎が9月22日に着工し、11月20日に竣工した。
- 11月25日に安曇野イヌワシ会よりイヌワシ自動体重測定機の贈呈を受けた。
- ライチョウ保護事業では注意標識の看板を烏帽子岳から槍ヶ岳までの裏銀座コースの主な山小屋とテント場に設置した。



ニホンイヌワシ

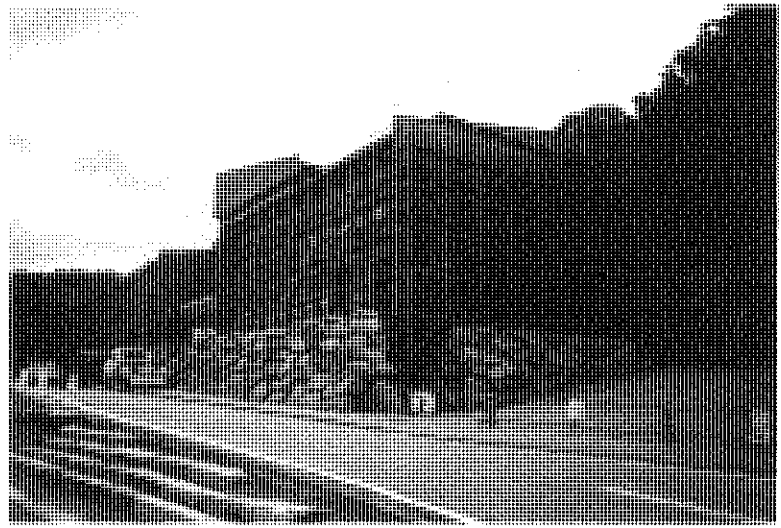
平成8（1996）年度

- 企画展・特別展は「穂苅貞雄写真展 安曇野 アルプス山麓の四季」、「春の草花と山菜展」「花や緑のある絵展」、「動物写生画展」「大町工芸展」「戸谷和郎写真展－野生の心 ニホンザルと共に－」「秋の草花とキノコ展」「三葉虫展」「西條八東 西條紀子 二人展」を催した。
- ライチョウは5月31日～11日に8個を産卵し、7月3日に4羽が孵化した。残りの4個は、無精卵2個、発生中止卵2個であった。4羽のうち1羽が9月14日に死亡した。
- ニホンカモシカの「クロ」（オス）と「ミネコ」（メス）の間に6月18日に1個体誕生したが、10月22日に死亡した。
- 昭和48年5月25日産まれのコブハクチョウが5月2日に、昭和42年12月2日に受け入れたニホンザル（オス）が7月11日にそれぞれ老衰により死亡した。
- 6月3日にアルプスマーモットが放飼場の金網を破り脱走し行方不明となった。

平成9（1997）年度

- 本館の外壁改修を6月7日～7月15日に行った。
- 「入館者増対策小委員会」を設置し、協議会委員より5名の委員により構成され11月27日に開催し、入館者増に関する事、企画展に関する事、将来像に関する事、付属園に関する事についての意見を聞くこととした。
- 企画展・特別展は「旅 西條八東・西條紀子 二人展」「斎藤寿の水彩画 パレットの中の野鳥たち」「標高3000mの世界を描く 金栄健介－山岳絵画展－」（併設して「白山の高山植物」）「牧潤一・山岳画展」「森勝彦写真展・奇跡の鳥ライチョウ」「キノコ展」「稜線からのメッセージ 竹村昭八写真展」「長野オリンピック文化・芸術祭参加 鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳の自然と歴史展」「八方尾根・近代スキーの父 福岡孝行」を催した。
- 友の会と共催で「小鳥の声を聞く会」を5月10・11日と開催した。

- ニホンカモシカの「シロ」(オス)と「マヤ」(メス)の間に4月24日に1頭(メス)が誕生したが、11月20日に死亡し、「クロ」(オス)と「ミネコ」(メス)の間に7月14日に1頭(メス)が誕生した。
- ライチョウ保護事業では営巣環境調査で8月28日～9月1日まで薬師岳、9月9日～12日まで爺ヶ岳において実施した。
- 11月16日にシャモアのオスが歩行困難となり、破傷風の症状を示し破傷風抗毒素血清などを用いて治療に当たるが、19日に死亡した。このシャモアは平成2年にオーストラリア・アルペン動物園から寄贈を受けた個体であり、アルペン動物園からの個体はいなくなり、平成2年に日本カモシカセンターから譲り受けたメス1頭となった。
- 単独飼育をしていたニホンイヌワシのメスによる繁殖を目指すため、仙台市八木山動物園よりオス個体のブリーディングローンの契約が1月25日に締結し、繁殖のための研修として1月26日～28日に仙台市八木山動物園へ、2月12～13日に秋田大森山動物園にて学芸員が飼育実習を受けた。

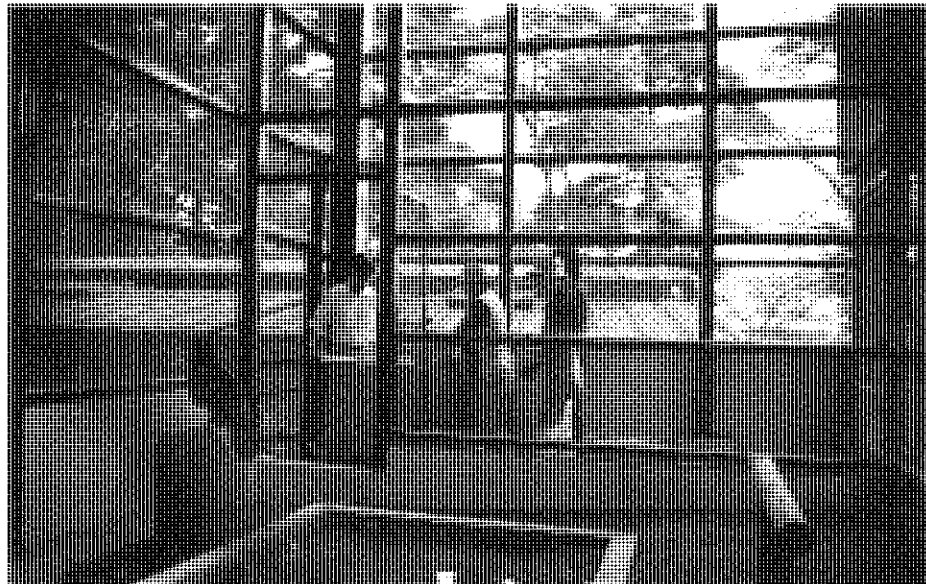


本館の外壁改修工事

平成10(1998)年度

- 「入館者増対策小委員会」を6月30日、10月7日に開催し、2月9日に山岳博物館協議会長に山岳博物館の活性化についての具申がなされた。内容は基本理念(案)として、山岳博物館は山をとりまく物や人や事象に関する資料について収集・保管・調査・研究し、それらを活用した展示、教育などを通して生涯学習の一助となる環境を整え、くつろげる場所を設けることとし、基本方針(案)では山岳博物館が扱うことがらを定め、利用者のためになすべきことを述べている。
- 友好提携を結んでいるインスブルック市のアルペン動物園マーチス園長、ホイマードー技師が来日し、名古屋で開催の世界動物園機構年次総会出席後、来館した。
- 1月5日にインターネット接続とセットアップがおこなわれ、通信による情報発信、情報交換の基盤ができ、29日にはホームページの仮開設をし、2月25日に公式ホームページを開設した。
- 企画展は「増村征夫 星の降る里」「動物写生画展」「日本山岳画協会展」「キノコ展」「林藪山人一美 安曇野風物画展」、特別展は「北アルプスの風にのせてー中川珠世切り絵展」「キルト糸車 さわやか信州パッチワードキルト展ー岳光る風のささやき 布遊ー」を催した。企画展は博物館が主体的に企画立案し施行する展示で、特別展は博物館が後援的な立場での展示とする。

- 6月15日～30日まで、ニホンイヌワシの繁殖のため、イヌワシ舎の巣棚設置工事を行い、7月6日に仙台市八木山動物園よりオスが到着した。12月10日に同居させ、メスの巣づくりや2羽での鳴き交わし行動などがみられたが、今期は産卵がみられなかった。
- 6月19～22日までライチョウの繁殖期調査を雪倉岳で実施し、孵化直後のヒナの行動等についての観察を行った。植生復元整備として唐松岳周辺の登山道沿いに裸地や荒地に土砂流失を防ぎ現地産植物種子を促すためにワラムシロを被覆した。また、営巣環境の把握のため6月30日に爺ヶ岳周辺と白馬岳三国境周辺の航空写真を撮影した。
- 飼育中のライチョウ2ツガイが産卵し、7月11日に5羽、7月8日に8羽が孵化したが死亡もみられ、年度末にはオス7羽、メス3羽となった。
- 「ライチョウを語る会」が実行委員会を組織し、建労センターにて10月29日に開催された。

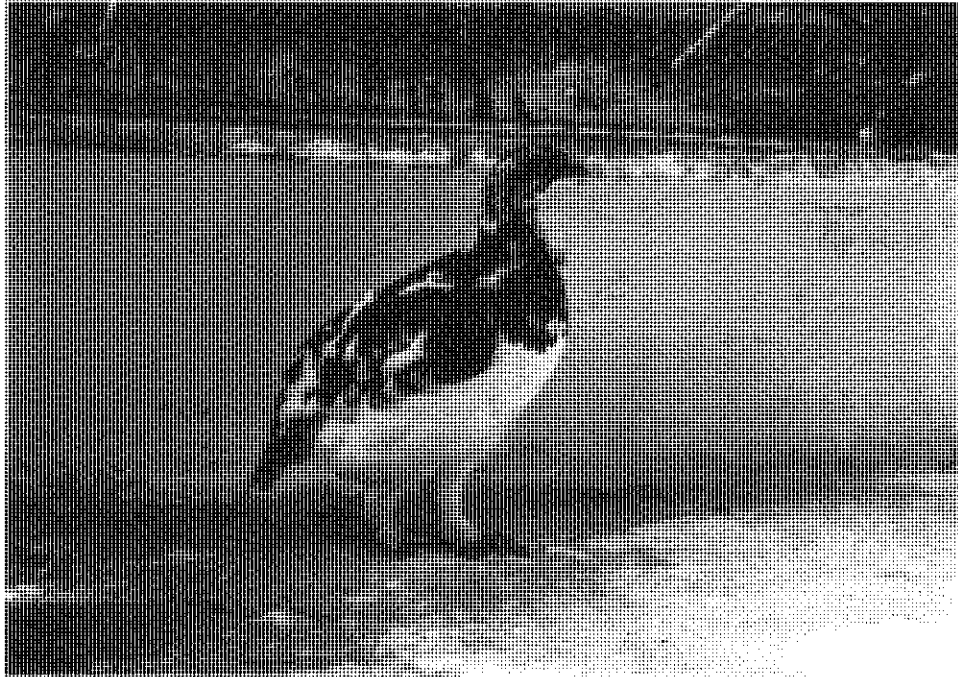


ニホンイヌワシのメス来園

平成11 (1999) 年度

- 山岳博物館のインターネットのホームページ充実に向けて、「山岳資料研究会」を12月に開催し、構成・作成・周辺環境の整備について検討を開始した。
- 企画展は「アルプスの見える風景－中沢義直とその仲間たち－」「動物写生画展」「木芸と彫彩－40年の軌跡－高橋貞夫展」「キノコ展－自然と上手に付き合おう－」「羽田智千代版画展－鳥的思考・虫的視点」、特別展は「我が心に映る山－賛歌四季－」、新着資料展として「スイスアルプス博物館からよせられた資料」を催した。
- 5月から東京学芸大学君塚助教授による山岳博物館に関する行政文書調査を開始した。
- ライチョウ保護事業では唐松岳において保全調査を8月2日～5日に、植生復元調査を10月13日に実施した。
- 飼育中のライチョウ10羽のうち繁殖用として3ツガイを飼育していたが、メス3羽がすべて死亡し、今後の繁殖が不可能となった。

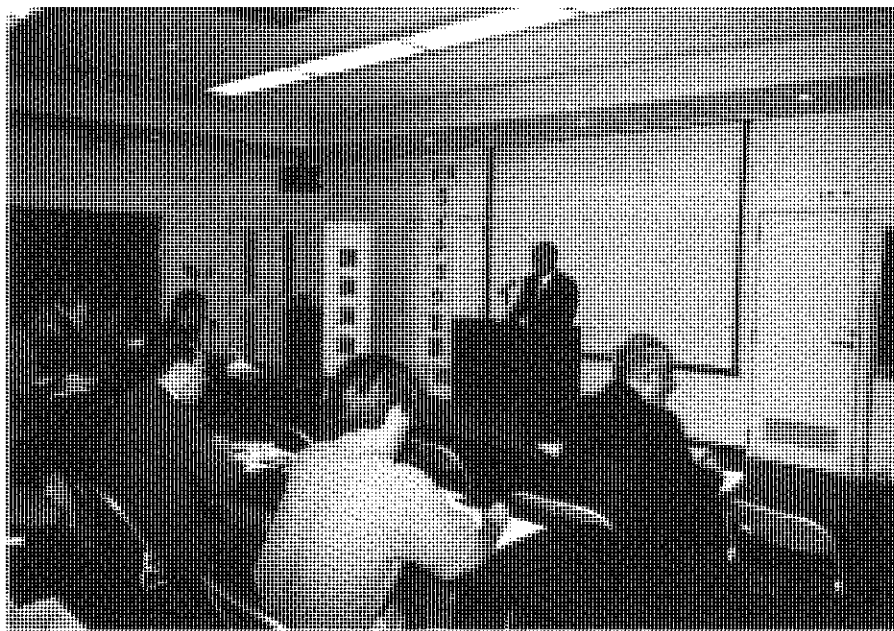
- ニホンイヌワシは10月12日から繁殖のため、一般公開を控えたが、交尾・産卵には至らなかった。
- ニホンカモシカはオス4頭、メス3頭のうち2ツガイで飼育した結果、両ツガイで出産がみられたが、2個体とも死亡した。



ライチョウのオス

平成12（2000）年度

- 企画展は「春の山野草展」「動物写生画展」「山川勇一郎絵画展」「キノコ展」「清流に泳ぐー大塚浩司・手作りの魚たちー」、新着資料展として「岩石・鉱物展」を催した。
- 大町市が提唱した「ライチョウ会議」が8月31日に発足し、1回目が大町市で開催された。この会議は、中部山岳に生息するライチョウの解明を通し、生息環境を含めた保護と人との共存の道を探ることに寄与するものであり、研究者・行政との情報交換や連携による組織化、調査の充実と現状の把握、具体的な保護活動の計画、ライチョウについての啓発を目的とした。
- ライチョウ保護事業では、3羽のオスの飼育を継続することと年度途中で死亡した2羽の死亡原因究明をした。生息状況調査として6月9～13日、7月7～9日に蓮華岳において調査を実施し、13の推定ナワバリを確認した。営巣環境を把握するために蓮華岳と白山の航空写真を撮影した。また、平成10・11年に実施した唐松岳周辺の緑化保全工の確認を行った。



第1回ライチョウ会議

平成13（2001）年度

○3月15日に大町市は「山岳文化都市宣言」を行った。これは山岳博物館創立50周年を機に、山岳文化の発展と創造をめざして、大町を自然と人との共生する山岳文化都市とすることを宣言したものである。

○創立50周年の記念事業は50周年特別企画展も含め、実行委員会により行った。

9月23日にサンアルプス大町にて「岩崎元郎・みなみらんぼう アウトドアズ トークショー」を開催し、小日向孝夫氏のコーディネートにより両氏の安全で楽しい山登りについて語っていただいた。また、映画「エベレスト海拔0mからの挑戦」を上映した。

9月24日には爺ヶ岳に日帰りの登山として「爺ヶ岳登山ー岩崎元郎・みなみらんぼうと登る爺ヶ岳登山教室ー」を開催した。この登山には武田武登山隊長をはじめ、大町山案内人組合、大町山岳会、大町山の会、山岳博物館友の会の方々の協力により安全で楽しい山行となった。

10月13日に大町市文化会館にて記念式典を挙行了。その後映画「特別天然記念物ライチョウ」を上映し、「シンポジウムー人・岳・博物館 新たな知の仕組みを考える」を行った。シンポジウムでは進行を扇田孝之氏により、今井通子、中村浩志、野口健、平林克敏、湯浅道男の各氏と柳澤昭夫館長がパネラーとなり、それぞれの立場から話題提供があった。また、野口健氏が回収した「エベレスト登山隊の廃棄物展」を同会場で開催した。

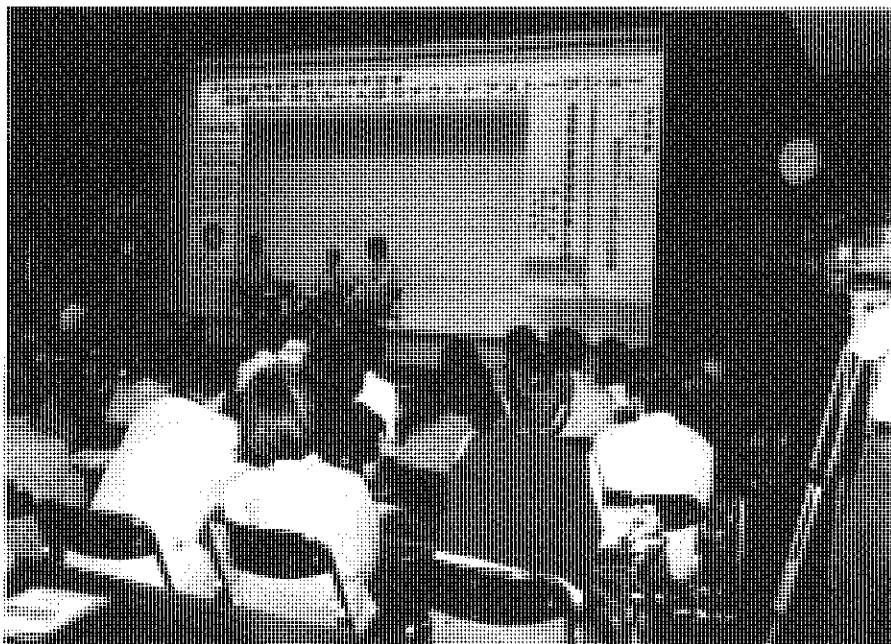
平成13年2月1日～10月13日にEメールコンクール「岳への想い」として山への想い、憧れの山、登山時のエピソードなどを募集し、優秀作5点を博物館のホームページに掲載した。

○50周年の式典に参加するため、オーストリアのアルペン動物園マーティス園長、アルペン動物園友の会ノイマイヤー会長が来市した。

- 50周年を記念して『ブルーガイド旅読本 上高地 安曇野 輝ける大地の自然と人』(実業之日本社発行)、『新・北アルプス博物誌』(信濃毎日新聞社発行)を編集し刊行した。
- 企画展は「50周年特別企画展 熊谷樵油絵展―山・雪・人―」「動物写生画展」「50周年特別企画展 岩橋崇至写真展―北アルプス幻想行―」「50周年特別企画展 齋藤清の世界展」「キノコ展」「50周年特別企画展 日本山岳写真協会松本支部―北アルプス山のたより―」「写真で綴る山博50年」「エベレスト登山隊の廃棄物展」、新着資料展として「平柳一郎氏よりよせられたスイスピッケル」を催した。
- 1月15日～3月15日まで展示改修のため休館とし、主に2階展示室「北アルプスの自然」のコーナーの刷新と2階の喫茶売店を1階に移設する工事を小林陽子事務所が施工し、3月16日にリニューアル・オープニングセレモニーを行った。
- 大町公園の「北アルプス展望園地」が竣工し、10月2日に完成式が挙行された。
- ライチョウ保護事業では3羽のオスの飼育を継続することと、営巣環境を把握するために6月に唐松岳、五龍岳、鹿島槍ヶ岳、岩小屋沢の航空写真を撮影した。また、唐松岳周辺の緑化保全工の効果を8月5日～7日、11月1日に実施した。さらに、過去にライチョウ生息の記録がある石川県白山において、9月4日～6日に現地で調査した。主な目的は植物相と植生からみたライチョウの生息環境、ライチョウの生息可能個体数、ライチョウの捕食可能性動物である。
- 「第2回ライチョウ会議」が8月29～30日に長野県山岳総合センターおよびサン・アルプス大町にて開催された。



山岳博物館創立50周年シンポジウム



アウトドアトークショー

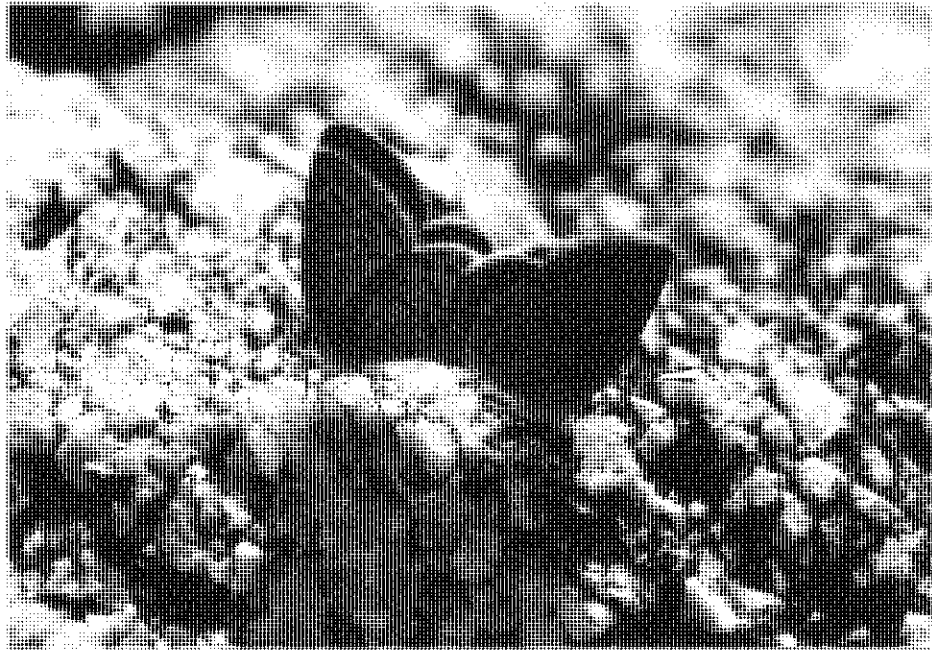


爺ヶ岳登山教室の岩崎元郎氏（左）とみなみらんぼう氏

平成14（2002）年度

- 8月4日、集中豪雨で博物館下の道路の一部が崩れ、普通乗用車のみが通行可能な状態になった。9月～10月に復旧工事をし、11月1日に通行可能となった。
- 9月22日、インスブルック市アルペン動物園創立40周年記念式典に、市長、館長、副館長が参列した。
- 企画展は「動物写生画展」「キノコ展」「對山館と百瀬慎太郎展」「シベリアオオヤマネコ展」「冬期登山者の服装展」を催した。
- 巡回バス「こども体験学習号」の到着に合わせ、小学生を対象に「山博おもしろミニゼミ」を3月23日から毎週土・日に開催した。またミニゼミの拡大版として「山博ゼミナール」を2月16日と22日に開催し、日ごろの研究成果を発表した。

- 「小鳥の声を聞く会」(5月12日)「春の写生大会」(4月～5月)「キノコ学習会」(9月22日)のほか「シンポジウム 岳の街おおまちと山岳環境」をサン・アルプス大町で開催し、江本嘉伸・今井通子・山田淳・土田勝義・尾沢洋の各氏を招き、山の環境などについての意見発表、意見交換等を行った
- ライチョウの生息状況調査として、6月23～29日・7月22日・9月14日に蓮華岳にて調査を行い、推定ナワバリ9ヶ所、推定生息数は22～23羽、産卵数は3～5個、孵化率85.7%等の結果が得られた。来年度からライチョウ保護事業に対する国、県の補助金が打ち切られることが決定された。
- 飼育しているオス3羽のライチョウを用いた低地性植物を用いた喫食行動では、ゲンノショウコなどに対して飼育下繁殖個体が野外において自ら植物を採食する可能性があることを示唆された。
- 大町市におけるクロツバメシジミは4月～10月に調査し、発生回数は昨年と同様で生息環境も比較的良好である。また、ミヤマモンキチョウについては7月30日～8月2日に爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳にて実施したが、生息の確認ができなかった。
- 安曇地方の絶滅危惧植物の生活史と増殖の研究では、イヤリトリカブト・ホロムイソウ・アズミノヘラオモダカ・アズミノイヌノヒゲ・フクジュソウ・ササユリに焦点をあて、生息地での観察とともに、栽培の可能性、他地域産との形態比較、新たな生育地の可能性、分類の検討、種子の散布型、花粉媒介の昆虫特定などを栽培や他地域での観察などによって情報を得た。
- 對山館と百瀬慎太郎の調査では、13回ほどの聞き取り調査をはじめ現地調査・文献調査・資料調査により大町の山岳文化の分野の研究の基盤が形成された。
- 『風雪のビパーク』足跡調査では、高瀬川の支流に出向き地理や環境の情報を収集し、二次資料へと結びつける記録がとれた。
- 登山が体に与える影響では、市民登山での燕岳登山者ならびに大町市立第一中学校の爺ヶ岳登山者でパルスオキシメーターを用いて計測し、高地の影響で血中酸素飽和度の低下がみられ心負担が増加した一方、一泊後の負担は燕登山者に変化はなく、中学生は心拍数の減少がみられた。
- 5月13日、シベリアオオヤマネコの「ミーコ」(メス)と「アイガー」(オス)の間にオス1頭、メス1頭が生まれ、人工哺育で育成した。この2個体は教育普及活動に供する目的で、学校法人川原学園東京動物専門学校へ11月12日に譲渡した。
- ニホンカモシカの「シロ」(オス)と「マヤ」(メス)の間に4月24日に1頭(メス)が誕生したが、10月7日に死亡し、「クロ」(オス)と「ミネコ」(メス)の間に5月14日に1頭(オス・のちに一般公募により「さくら」と命名)が誕生した。
- 「第3回ライチョウ会議」が8月25～26日に、富山県天狗平にて開催された。



クロツバメシジミ

平成15 (2003) 年度

- 1階ホールのピッケルケース、3階の写真台、展示ケース・冷房設備を八王子岳友会の寄附により一新できた。同会は12月に解散したが、1月10日に市長出席のもとに贈呈セレモニーを開催した。
- 8月～3月の期間、約3,000冊の図書資料を市立大町図書館のシステム (TRCD) への登録し、約3,550点の山岳資料の写真撮影と整理作業を行った。
- 企画展は「志水哲也写真展 黒部」「安曇地方の絶滅危惧植物の生活史展」「教科書に登場した北アルプス『燕岳に登る』って知っていますか?」「動物写生画展」「クロツバメシジミの生活史展」「キノコ展」「中部山岳鳩協会展ー伝書鳩を使った山岳通信ー」、特別展は「穂苅三寿雄作品展 北アルプス黎明」「日本山岳画協会大町展」を催した。
- ライチョウの生息状況調査として、6月23～29日・7月29日～8月1日に蓮華岳にて調査を行い、推定ナワバリ9ヶ所、推定生息数は21～23羽と昨年とほぼ同じ、産卵数は4～5個、孵化率88.8%等の結果が得られた。
- 植生復元整備確認調査として、5年経過した唐松岳におけるムシロによる緑化工法のモニタリングを行うため、8月21～23日に調査を行った。結果は10個すべての調査枠において少なからず人為的インパクトが生じていることが明らかになった。
- 大町市におけるクロツバメシジミの生息状況調査では、新たに本種の食草であるツメレンゲの自生地をいくつか確認できた。また、ミヤマモンキチョウの調査は7月22～25日に爺ヶ岳～赤沢岳にて、7月29日～8月1日に蓮華岳～スバリ岳で実施したが、生息の確認はできなかった。
- 安曇地方の絶滅危惧植物の生活史と増殖の研究では、イヤリトリカブトは発芽から開花個体になるまで4年を要すること、ホロムイソウは現地調査でここ数年ほとんど開

- 花していないこと、アズミノヘラオモダカは発芽率解明のため種子を採取したこと、フクジュソウは瘦果の散布に3種のアリが関与していること、ササユリはスズメガ媒植物であることが強く示唆されたこと、ビッチュウフウロの開花様式は雌雄期から雌性期であることなどの成果が得られた。
- コマクサの生活史の研究は博物館で栽培しているコマクサを用いて開花特性、受粉、散布、発芽～実生・幼植物の形態および特性について観察を行った。
 - 鹿島槍荒沢奥壁の冬期初登頂と東京商大（現一ツ橋大学）山岳部と小谷部全助氏の調査については、氏の山日記と数葉の写真の寄贈を受けたのを機会に、鹿島槍東尾根・荒沢・大冷沢などに16回の入山調査を行い、当時のアプローチルートについて検証した。
 - ニホンカモシカの「シロ」（オス）と「ミネコ」（メス）の間に5月14日に1頭（オスのちに一般公募により「岳」と命名）が誕生した。
 - 飼育しているオス3羽のライチョウが、7月3日に1羽、11月13日に1羽、2月17日に1羽が死亡し、博物館におけるライチョウ飼育個体はいなくなった。
 - 環境省の委託事業として、ライチョウ生息地航空写真の解析を行い写真のデジタルモザイク化を行った。また、海外の近似種での飼育状況の情報を集積するため、ノルウェーのトロムセ大学、オスロ大学に副館長と学芸員が出向き、飼育施設、飼育方法などの基礎資料を収集した。
 - 「山博おもしろミニゼミ」を毎週土曜日（12月～3月は日曜日のみ）に開催したほか、「小鳥の声を聞く会」（5月12日）「春の写生大会」（4月～5月）「山野草を楽しもう」（4月26日・6月7日）「カモシカの生活を題材にした学習」（7月26日・1月10日）「鹿島槍本谷で遊ぼう」（8月16日）「キノコ学習会」（9月22日）「自分の山を作ろう！ 山岳陶芸にチャレンジ」（11月9日・12月7日）「親子探鳥会」（1月25日・2月14日）を行った。これらの事業の一部は財団法人自治総合センターの宝くじ普及広報事業の一環としてのコミュニティ助成事業（青少年健全育成助成事業）の助成金で実施した。
 - 昨年度に試行的に行われた大系タイムス土曜版への「山博ゼミ」は本年度49回の掲載をした。
 - 「第4回ライチョウ会議」が9月6～7日に東京農業大学で開催された。



ササユリとエゾシモフリスズメ

平成16 (2004) 年度

- ライチョウ飼育研究に取り組み、これまで40年にわたり低地飼育を実施してきたが、平成16年2月に最後の1羽が死亡したことを機に過去の事業について見直し、今後の取り組みについて検討する山岳博物館ライチョウ保護事業検討委員会を開催した。

9月6日 第1回大町山岳博物館ライチョウ保護事業検討委員会

*今までの成果について説明・意見交換

11月19日 第2回大町山岳博物館ライチョウ保護事業検討委員会

*今までの成果について意見交換をし、課題について3つの小委員会に分かれて具体的検討をすることとなった。

12月22日・平成17年2月7日 社会教育分野小委員会

16年12月28日 野外調査分野小委員会

平成17年2月28日 低地飼育分野小委員会

平成17年3月9日 小委員会統括会議

平成17年3月15日 第3回大町山岳博物館ライチョウ保護事業検討委員会

*各小委員会における検討結果を踏まえ、今まで実施してきた事業に対しての客観的な評価と、今後大町市として取り組むべきライチョウ保護事業指針についての提言を行うこととした。

- 企画展は「針ノ木岳慎太郎パネル展」「動物写生画展」「キノコ展」「伊藤孝一没後50年山岳映画誕生 雪の絶巔にカメラを廻す」、特別展は「森下恭写真展 大いなる黒部」「全国雪形写真展」を催した。

- 大町市におけるクロツバメシジミの調査を4月～10月に調査し、発生回数は比較的良好であった。また、ミヤマモンキチョウについては7月14・15日に湯俣岳周辺にてメス1個体を確認、7月20～23日に三ッ岳～烏帽子岳にて、また8月4日～8月7日に蓮華岳～スバリ岳にて調査し、産卵環境等についていくつかの見地を得た。7月27日～7月29日に爺ヶ岳にて調査したが生息の確認ができなかった。

- 里山の甲虫調査として、友の会「こども探検クラブ」の協力を得て実施し、カブトムシ・ミヤマクワガタなど133個体にマーキングし、そのうち2個体が再捕獲された。

- 安曇地方の絶滅危惧植物の生活史と増殖法の研究では、ホロムイソウでは開花が見られたことから葯の裂開状況について観察を行った。アズミノヘラオモダカでは主に発芽率の調査を行い、その後の成長について追跡調査を行った。フクジュソウでは3年目になる栽培個体の観察を行った。ササユリでは訪花昆虫としてスズメガが訪れていることを再確認した

- コマクサの生活史の研究では博物館において袋がけを行い受粉および結実特性について観察し、栽培すると早いものでは発芽後2年で開花に至ることが明らかになり、コマクサの他家受粉にはマルハナバチが大きく貢献することが考えられた。また、7月20～23日に北アルプス烏帽子岳、8月4日～8月7日に蓮華岳において葯の裂開様式について観察を行った。

- 大町周辺の山人たちの活動と近代登山黎明期への影響調査として、遠山品右衛門、上條嘉門次、小林喜作ら北アルプスの山人（やまうど）について、彼らが使った道具など関係資料の所在を確認するとともに、二次資料を収集した。
- 7月17日に市制施行50周年記念フォーラムとして、太田昌秀氏（元ノルウェー極地研究所教授）の「北極海の探検史と環境問題」と題した基調講演のあと、パネルディスカッションを柳澤館長のコーディネイトにより太田昌秀氏、小島秀康氏（国立極地研究所、第44次南極観測越冬隊長）、平林克敏氏（日本山岳会副会長、エベレスト登頂者）が「三つの極地から地球環境を考える」をテーマに行い、人間はもっと謙虚な気持ちになるべきで、自然を保護したり愛したりするのではなく、人間は自然の中で生かしてもらっているという意識改革がないと環境問題は解決しないとのまとめになった。
- 「山博おもしろミニゼミ」を毎週土日曜日（12月～3月は日曜日のみ）に開催したほか、「小鳥の声を聞く会」（5月19日）「春の写生大会」（4月～5月）、「キノコ学習会」（9月23日）を行った。
- 大系タイムス土曜版への「山博ミニゼミ」は、大町市文化財センターの「文化財の散歩道」と交互に行うこととし、25回を掲載した
- ニホンカモシカの「クロ」（オス）と「ミネコ」（メス）に間に5月12日に1頭（メス・のちに一般公募により「さつき」と命名）が誕生し、「シロ」（オス）と「マヤ」（メス）の間に1頭（メス・のちに一般公募により「わかば」と命名）が誕生した。
- ホンダザル（メス）が平成17年2月18日に死亡し、博物館でのホンダザルの飼育個体はいなくなった。
- 「第5回ライチョウ会議」は8月22～23日に、高山市市民ホールにて開催された。



コマクサとオオマルハナバチ

平成17（2005）年度

- 7月5日、信州大学山岳総合研究所と当館は、研究協力協定について締結を行なった。目的は山岳および大町市とその周辺地方の民俗、歴史などの資料を収集、保管、展示し一般の観覧に供し、本邦における山岳文化などの普及並びに調査研究を行う市立大町山岳博物館と、信州の自然と社会をフィールドとして、山岳およびそれに連なる里山における自然と人間の相互関係にかかわる諸問題の解決を目指した研究を行い、新しい学問領域「山岳科学」を創造しようとする信州大学山岳科学総合研究所は、相互の連携の意義を深く認識し、自然と人間の共生の諸課題探求に力をあわせて貢献することとした。
- 本館にアスベストが使用されている可能性があるため、8月10日～26日を緊急に臨時休館し検査を行った。その結果アスベストの検出は見られないことがわかった。そのため、今年度の予定であった企画展「くさばなの一生 日本草本と外来草本の生活史—その営みとなぞにせまる！！—」は翌年度に延期となった。
- 財団法人日本生命財団（大阪市）の出版助成を得て平成17年度より編集を進めてきた『北アルプスの自然と人—市立大町山岳博物館展示案内—』が4月10日に発行され、4月21日に大町市役所で贈呈式が行われ、完成品3,860部を同財団から大町市へ寄贈していただいた。
- 平成18年1月1日に1市2村（大町市、美麻村、八坂村）が合併（大町市への編入合併）し、当館の住所表記が長野県大町市大町8056-1と変更になった。（旧表記は長野県大町市大字大町8056-1）
- 大町市におけるライチョウ保護事業を策定するにあたり、「氷河期から生きるライチョウとともに—大町におけるライチョウ保護事業の今後のあり方—」を受けて具体的な施策を検討する大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会を開催した。
 - 7月7日 第1回大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会
 - * 山岳博物館ライチョウ保護事業検討委員会報告書について説明と委員会への要望、先進事例の豊岡市のコウノトリ保護事業の取組みについての説明
 - 8月10日 第2回大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会
 - * グランドデザインおよびパイロットプランの構想、分科会の設置（各分科会は8月12日から10月27日の間、メールなどを用い随時意見交換を行い計画案の作成）
 - 9月22日 第3回大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会
 - * 各分科会における検討結果と提案
 - 11月8日 第4回大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会
 - * 報告書の提出
- 大町市が実施するライチョウ保護の展開方針として、大町市では大町山岳博物館ライチョウ保護事業検討委員会と大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会から提出された提言を重く受け止め、教育委員会を中心に慎重に検討した結果、次のような事業展

開方針を決定した。

(1) はじめに

大町市では、大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会から、ライチョウ保護を「自然と人間との共生」という大きな潮流のなかに位置付け、大町市の「まちづくり」の総合プロジェクトとするランドデザインと、もうひとつはライチョウの将来的な危機に備えるセーフティー・ネットをいかに構築するかという学術的、技術的なパイロットプランの提言を受けた。

大町市で検討した結果、ライチョウ保護事業は本来、国等が中心となって進める事業であり、現時点では、ランドデザインを基調とした事業を大町市が実施することについては、提言を尊重しながらも、すべてを直ちに展開することは困難である。また、パイロットプランの実施にあたっては当市の財政事情を考慮すれば、国・県の支援が得られるまでは、事業を見合わせざるを得ない。

(2) 今後の方針について

- ①「ライチョウと共に生きる」を理念とした考え方を取り入れながら、山岳博物館が主体となってライチョウに関する事業を展開する。
- ②現地（生息域内）調査を中心に調査研究事業を進め、調査結果については教育普及活動等に活用する。
- ③ライチョウに関する教育活動を学校教育、社会教育、登山者への啓発という側面から展開し、情報の収集・発信に努める。
- ④パイロットプランについては現時点では計画の遂行を凍結し、国や県の援助体制や財政状況の動向をふまえて今後、実施の判断をする。

(3) 事業展開について

当面の間、現地調査、教育普及活動の2つを大きな柱にすえて、下記の内容を中心に事業を展開する。

なお、調査事業については、外部専門家を交えた委員会を設置し、具体的事業内容を決定したい。

①現地調査

- a. 現状把握調査として「生息場所」、「生息数」等。
- b. 生息環境調査として「植生環境」、「ライチョウをとりまく動物環境」、「積雪環境」等。
- c. 繁殖調査として「採餌」、「エネルギー出納」、「遺伝的特性と多様性」等。
- d. 保護対策調査として「環境の変化と生息状況の変化」等。

②教育普及活動および啓発活動

- a. 登山者や山小屋からのライチョウに関する情報の収集。
- b. 「企画展」「講演会」等の開催。
- c. ポスター・パンフレットなどの作成と配布・掲示。
- d. ライチョウの生態と保護についての「副読本」「映像資料」を作成。
- e. 環境教育プログラムを作成し、フィールドにおける「観察会」や学校教育で

の「総合学習」での活用。

- 企画展は「播隆・槍への道程—善の綱をたどれば—」「動物写生画展」「キノコ展」、特別展は「近藤辰郎写真展 槍ヶ岳讃歌」を催した。
- 大町市におけるクロツバメシジミは4月～10月に調査し、発生回数は比較的良好であった。また、ミヤマモンキチョウについては7月20～22日に蓮華岳、9月28～30日に爺ヶ岳にて調査したが、生息の確認ができなかった。
- 里山の甲虫調査として、友の会「こども探検クラブ」と「大町北小学校」の小学生の協力を得て実施し、カブトムシ・ミヤマクワガタなど99個体にマーキングをつけ、そのうち3個体が再捕獲された。
- 安曇地方の絶滅危惧植物の生活史と増殖法の研究では、ホロムイソウでは開花期間中の気温を測定した。アズミノヘラオモダカでは早い個体で2年目に開花個体に至ることが明らかになった。フクジュソウでは博物館で育てて4年目になる個体の観察を行ったが開花にまでは至らなかった。ササユリでは訪花昆虫とし新たにエゾシモフリズメの訪花を確認した。同時にベニスズメ、コスズメ、コエビガラスズメ、ハネナガブドウズメの写真撮影ができた。
- コマクサの生活史の研究では7月19～21日に蓮華岳においてコマクサを訪れるマルハナバチの観察を行うとともに写真およびビデオ撮影を行った。その結果、コマクサへはオオマルハナバチ、ナガマルハナバチおよびニッポンヤドリマルハナバチの3種が訪花し、そのうち、オオマルハナバチのみが盗蜜するのを確認した。
- 大町周辺の山人たちの活動と近代登山黎明期への影響調査として、遠山品右衛門、上條嘉門次、小林喜作ら北アルプスの山人（やまうど）について、彼らが使った道具など関係資料の所在を確認するとともに、二次資料を収集した。
- 「山博おもしろミニゼミ」を毎週土日曜日（11月～3月は日曜日のみ）に開催したほか、「小鳥の声を聞く会」（5月8日）「春の写生大会」（4月～5月）、「キノコ学習会」（9月23日）、「親子探鳥会」（2月26日）を行った。
- 大系タイムス土曜版への「山博ミニゼミ」は、大町市文化財センターの「文化財の散歩道」と交互に行い、25回を掲載した
- 第6回播隆シンポジウム「播隆を探る—近世の聖と播隆—」をネットワーク播隆との共催で6月5日にサン・アルプス大町にて開催した。企画展「播隆・槍への道程—善の綱をたどれば—」に関連したシンポジウムとして、基調講演「播隆の生涯と近世の聖たち」（ネットワーク播隆代表・黒野こうき氏）、「弾誓寺・史跡見学について」（大町市文化財センター学芸員・清水寿隆氏）、播隆展の見学（自由参加）、パネルトーク「播隆を探る—近世の聖と播隆—」（パネラー：布川欣一氏、宮島佳敬氏 進行：黒野こうき氏）のほか史跡見学として弾誓寺見学を実施した。
- ニホンカモシカの「クロ」（オス）と「ミネコ」（メス）に間に5月15日に1頭（オス）が誕生し、「シロ」（オス）と「マヤ」（メス）の間に1頭（オス）が誕生したがいずれも人工哺育・飼育中に死亡した。
- 昭和60年10月28日に大町市とインスブルック市並びに当館とアルペン動物園が友好

提携の締結を記念し、交換動物として来館したアルプスマーモット（オス）が8月24日死亡した。これにより山岳博物館でのアルプスマーモットの飼育個体はいなくなった。

- 平成16年度に引き続きライチョウの今後の取り組みについて検討するための第4回山岳博物館ライチョウ保護事業検討委員会を開催し、本委員会における検討結果の報告書『氷河期から生きるライチョウとともに一大町山岳博物館におけるライチョウ保護事業の今後のあり方―』として、今まで実施してきた事業に対しての客観的な評価と、今後、大町市として取り組むべきライチョウ保護事業指針についての提言を受けた。
- 「第6回ライチョウ会議」が8月20～21日に、山梨県南アルプス市芦安小学校体育館にて開催された。

平成18（2006）年度

- アンケートを実施し来館者の動向を把握した。企画展「くさばなの一生」（8月11～26日）では関東、関西、東海地方からの観光客で賑わい、リピーターではないことが明らかになった。博物館の情報は、観光案内所、雑誌、口コミが半数を占め、インターネットによる情報入手はわずかであった。友の会主催によるコンサート（11月芸術に対しても興味を持っていることが伺える結果となった。「居谷里湿原の自然にせまるin山博」（11月12日）では長野県内からの参加者が大半を占め、市町村別に見ても広い範囲からの参加が認められた。参加者の情報入手先は新聞が最も高く、続いて博物館機関紙「山と博物館」であった。
- 企画展は「動物写生画展」「ボタニカルアートで描く くさばなの一生 日本の草本・外来草本の生活史 その営みとなぞにせまる！！」「キノコ展」「ライチョウの生態と飼育」「博物館のあゆみ」「北アルプス 山人たちの系譜―嘉門次、品右衛門、喜作登場の背景―」、特別展は「白馬SHIROUMA 菊池哲男写真展」を催した。
- 大町市におけるクロツバメシジミは4月～10月に調査し、発生回数は比較的良好であった。また、ミヤマモンキチョウについては7月15～16日、10月6～7日に湯俣岳周辺にて調査し成虫・卵は確認したが成虫を確認することができなかった。8月8～9日に爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳にて調査したが、生息の確認ができなかった。
- 里山の甲虫調査として、友の会「こども探検クラブ」と「大町北小学校」の小学生の協力を得て実施し、カブトムシ・ミヤマクワガタなど89個体にマーキングし、そのうち2個体が再捕獲された。
- 安曇地方の絶滅危惧植物の生活史と増殖法の研究では、ホロムイソウでは自生地で開花期に湿原の温度測定を行い葯の裂開との関係について検討した。フクジュソウでは博物館で育てて5年目になる個体の観察を行ったが開花にまでは至らなかった。また、自生地にて複合瘦果が熟した散布期に、落下した瘦果には数種のアリがエライオソームを目的に集まり、運ぶことを昨年に確認された。トキソウでは訪花観察からマルハナバチが有力な花粉媒介昆虫であることが示唆された。
- 大町周辺の山人たちの活動と近代登山黎明期への影響調査として、遠山品右衛門、上

條嘉門次、小林喜作ら北アルプスの山人（やまうど）について、彼らが使った道具など関係資料の所在を確認するとともに、二次資料を収集し、年譜を作成した。

- 「山博おもしろミニゼミ」を毎週土日曜日（11月～3月は日曜日のみ）に開催したほか、「大町市内の山岳文化史跡探訪 登山史見て歩き隊」（4月～8月）、「小鳥の声を聞く会」（5月14日）「春の写生大会」（4月～5月）、「キノコ学習会」（9月23日）、「居谷里の自然にせまるin山博」（11月12日）、「親子探鳥会」（12月17日）を行った。
- ニホンカモシカ（メス：平成16年5月31日繁殖 愛称：わかば）を、平成18年10月18日に繁殖を目的として東京都大島公園に無償譲渡した。
- 「第7回ライチョウ会議静岡大会」が8月18～19日に、静岡市もくせい会館にて開催された。

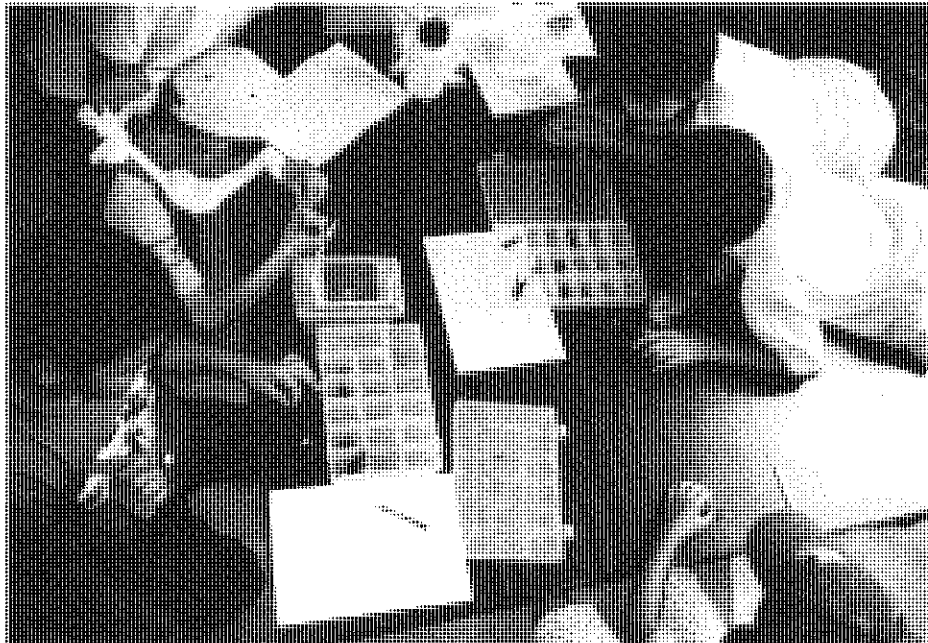


企画展「山人たちの系譜」を学ぶ大町東小学校の児童

平成19（2007）年度

- 企画展は「動物写生画展」「よみがえる高嶺の草花—志村烏嶺植物標本—」「キノコ展」を催した。
- 6月29・30日と、7月24～26日にライチョウの生息状況を長野県環境保全研究所と共同で実施し、種池山荘から爺ヶ岳北峰までの稜線に8ツガイが、また、岩小屋沢岳周辺では2ツガイが形成していたと推測し、爺ヶ岳周辺では20羽前後、岩小屋沢岳周辺には5羽前後のライチョウが生息していると推測した。
- 里山の甲虫調査として、友の会「こども探検クラブ」と大町市立の小学校全校（6校）との協働調査を6月29日～8月30日に実施し、カブトムシ・ミヤマクワガタなど230個体にマーキングし、そのうち5個体が再捕獲された。また、最も移動距離の長かった個体はノコギリクワガタのメスで約2,225mであった。
- 安曇地方の絶滅危惧植物の生活史と増殖法の研究では、フクジュソウは博物館で育てて7年目になる個体の観察を行ったが開花にまでは至らなかった。アズミノヘラオモダカについては安曇野市三郷・豊科および松本市島内において野外観察を行った。

- 博物館の日々の活動内容や調査研究、付属園の動物たちの内容で、市役所市民ホールにて次のような展示を行った。アニマルウォッチング～もっと近くで見てみよう～（5月1日～18日）、「大北地方の絶滅危惧植物たち」（6月11～29日）、「アニマルウォッチング」（9月3～21日）、「山の賛歌がきこえる」（10月26日～11月9日）、「カモシカのお休み処」（12月12～27日）、「アニマルウォッチング」（2月25日～3月14日）。好評のため付属園の動物を中心に今後も実施する。
- 「山博おもしろミニゼミ」を毎週土日曜日（11月～3月は日曜日のみ）に開催したほか、「小鳥の声を聞く会」（5月13日）「春の写生大会」（4月～5月）、「居谷里の自然にせまる～ハナノキの現状について～」（6月17日）、「夏休み親子昆虫教室」（7月28～29日）、「夜のミュージアムに伴う絵本の読み聞かせ」（8月24・25日）、「キノコ学習会」（9月30日）、「親子探鳥会」（12月15日）を行った。また、「付属園スタンプラリー」を4月28日～5月6日、7月14日～8月19日、10月20日～11月4日に新しい企画としてスタートした。
- 標高2,400m以上の大町市の山々の風景を対象とした山岳フォトコンテスト「アルプス一万尺一岳都大町をめぐる山々」では28点が応募され、近藤辰郎氏の審査により金賞1点、銀賞2点、銅賞2点、入選5点が選出され、博物館のパンフレットの表紙を飾る。
- 「第8回ライチョウ長野大会」が8月18～19日に、サン・アルプス大町にて開催された。



昆虫にマーキングする児童



パンフレット（山岳フォトコンテストの作品）

平成20（2008）年度

○大正時代から昭和30年代の北アルプス、とくに鹿島槍ヶ岳を中心とした登山史の基礎調査、検証をするために会を設けて検討をした。

4月20日 第1回会合

*これまでの関連文献を総合した「(仮称)後立山研究」の総合的な基本文献の作成を提起された。これ以外にも各大学の部報など関連する資料を統合した資料集の作成も要請された。

21年1月29日 第2回会合

*原稿執筆が概ね終了し、博物館との細部の内容の確認作業を行った。

これらの内容は平成22年3月31日に『北アルプス登山史資料1』として刊行した。

○企画展は「雪形展－山麓の民俗－」「アルプス一万尺－岳都大町をめぐる山ター」「動物写生画展」「カブトムシとクワガタムシ－里山の甲虫たちの未来は？－」「キノコ展」「ピッケルの輝き 収蔵資料展」、特別展は「第6回日本山岳画協会大町展」「私の心のふるさと山展 ～市内小中学生が描いた山岳画展～」 「山と祭り 漆絵画展by岩淵陽人」を催した。

○北アルプスの人文・自然科学の学問を横断して、地域を考え、互いに学習を深めていく場として、友の会や一般市民の参加を募り平成20年7月16日より「大町山岳文化研究会」として16名で活動を開始した。

○餓鬼岳周辺におけるライチョウの生息状況調査を6月28日～7月1日に実施し、抱卵中のメス1羽の個体を確認したが、オスの姿や鳴き声は確認できなかった。

○安曇地方の湿地植物における生活史を研究するため、観察員を一般募集し5名の応募があり、このグループを「大北地域の湿地植物の生活史研究グループ研究会」とし、1月24日から活動を開始した。調査の対象植物は、ミズバショウ、リュウキンカ、サワオグルマ、カキツバタ、コオニユリ、クサレダマ、ミソハギ、サワギキョウ、アカバナ、ミズオトギリである。

- 昭和初期に行われた鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁、北壁の初登攀について検証するため、鹿島槍ヶ岳荒沢（4月23～25日）、カクネ里（8月13～15日、3月16～18日）に入山し、積雪雪崩の状況、地形、雪崩、登攀ルート等について調査した。
- 爺ヶ岳登山における大町第一中学校生徒がからだに受ける影響を調査したところ、気圧の影響を受けて、呼吸と心臓の循環機能に大きな負担がかかっているという結果となった。
- 夏休み昆虫相談コーナーを7月下旬～8月下旬に行われた。
- 「山博おもしろミニゼミ」を毎週日曜日に開催したほか、付属園スタンプラリー（4月26日、5月6日、7月19日～8月24日、11月1日～3日）、「小鳥の声を聞く会」（5月11日）「春の写生大会」（4月～5月）、「キノコ学習会」（9月28日）、「親子探鳥会」（12月14日）を行った。
- ニホンカモシカの「ハクバ」（オス）と「オタリ」（メス）に間に7月9日（オス・のちに一般公募により「クロベ」と命名）に1頭が誕生した。
- 「第9回ライチョウ新潟大会」が8月18～19日に、ウエルサンピア新潟にて開催された。

平成21（2009）年度

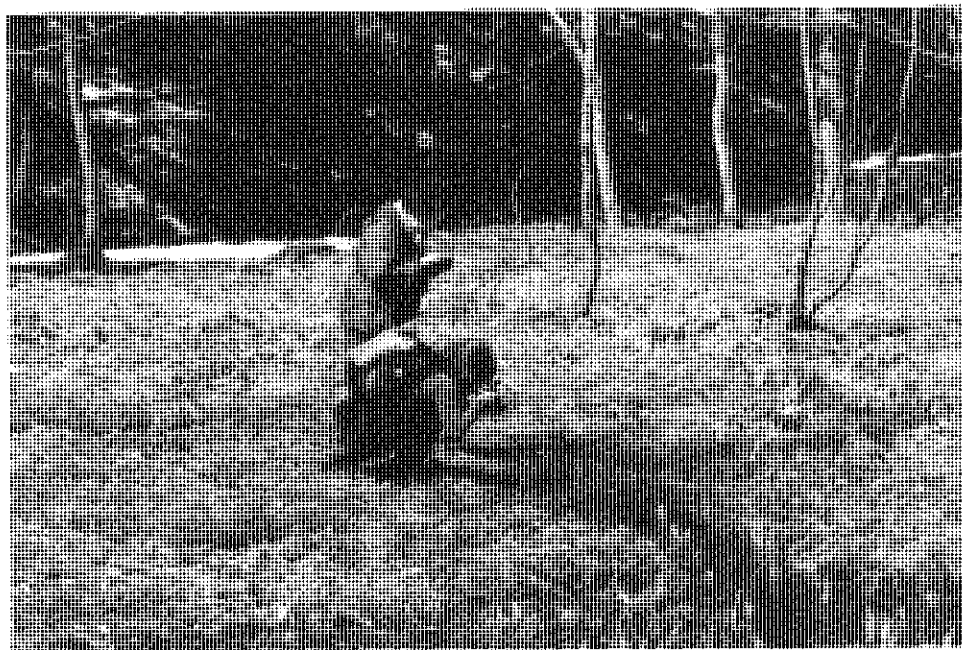
- 付属園に新たな管理棟（52㎡）を建設し、3日31日に竣工した。
- 企画展は「羽は語る」「動物写生画展」「アルピニズム誕生 昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」「キノコ展」「日本アルプス・富士山・白山・研究室発 高山の自然は今… —そしてその未来は」、特別展は「刻—凜然の軌跡 高橋貞夫展」「羽田栄治写真展 ネパール・ヒマラヤ今昔—山と人—」を催した。
- 安曇地方の湿地植物における生活史の研究では研究グループ4名の観察で、ミズバショウ、リュウキンカ、サワオグルマ、カキツバタ、コオニユリ、クサレダマ、エゾミソハギ、サワギキョウ、アカバナ、ミズオトギリの果実形態、種子散布型、種子数、種子形態の特徴の観察、発芽から開花個体に至るまでの形態変化の観察、開花時間、開花様式の観察および訪花昆虫の行動の観察を行った。
- 餓鬼岳周辺におけるライチョウの生息状況調査を6月27日～30日に実施したが、生息の痕跡や姿を確認できなかった。また、燕岳周辺のナワバリの北限は北燕岳～燕岳間の燕岳寄りであった。
- 昭和初期に行われた鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁、北壁の初登攀について検証するため、八方尾根、白沢天狗尾根（3月21～23日）に入山し、積雪雪崩の状況、地形、登攀ルート等について調査した。
- 山岳文化創出事業遂行のため、友の会に当事業を委託し、鹿島槍ヶ岳を中心とした資料の収集・未調査資料の掘り起こし作業を実施し、『北アルプス登山史資料1 鹿島槍ヶ岳登山史』作製の為の編集作業、データ入力作業、写真撮影、著作権承諾事務、校正作業を行った。
- 6月から8月にかけて付属園の動物写真展を市内6小学校、市立大町図書館で開催さ

れた。

- 「山博おもしろミニゼミ」を毎週日曜日に開催したほか、付属園スタンプラリー（4月25日～5月6日、7月18日～8月16日、9月19日～23日、10月31日～3日）、「春の写生大会」（4月25日～5月6日）、「小鳥の声を聞く会」（5月10日）「昔懐かしい16mm映画上映会」（8月21日、27日）、「夜の動物見学会」（8月22日、28日）、「キノコ学習会」（9月27日）、「親子探鳥会」（12月13日）を行った。
- ニホンカモシカ（オス：平成20年7月9日繁殖 愛称：クロベ）を 10月13日に埼玉こども動物自然公園にブリーディングローンとして貸し出した。
- サクラソウの栽培展示を駅周辺で行った。
- 「第10回ライチョウ東京大会」が11月2～3日に、恩賜上野動物園・動物園ホール、東京大学弥生講堂一条ホールにて開催された。
- 柳澤昭夫館長が3月23日に逝去された。



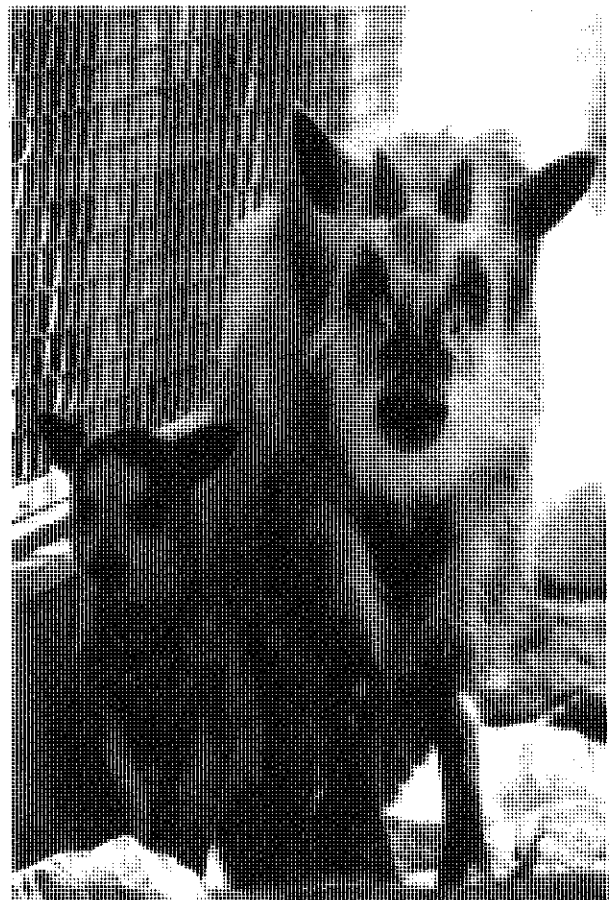
企画展「アルピニズム誕生」関連イベント
(大冷沢)



湿地植物の生活史の研究（居谷里湿原）

平成22 (2010) 年度

- 企画展は「動物写生画展」「カモシカを育てる」「キノコ展」、特別展は「山岳パノラマ写真展」「山岳同人四季写真展 我が心に映る山 ー山への誘いー」が催された。
- 大町市と信州大学は平成19年12月に包括的連携協定を結んだ。そのひとつとして、信州大学や北安曇理科研究会との協働で、今年度よりコア・サイエンス・ティーチャー (CST) 養成拠点事業を実施した。これは大町・北安曇地域の小中学校で、主に地質関係の授業で活用できる野外での見学・体験場所や学習素材などを開発するプログラムである。
- 安曇地方の湿地植物における生活史の研究では5名の観察で、アカバナおよびエゾミソハギは1年目、リュウキンカは2年目、サワオグルマは3年目で開花にいたることが明らかになり、3年目のミズバショウの実生、1年目のクサレダマ、サワギキョウおよびミズオトギリ、2年目のカキツバタは開花個体にまで成長しないことが明らかになった。
- 餓鬼岳周辺におけるライチョウの生息状況調査を6月26日～29日に実施したが、生息の痕跡や姿を確認できなかった。また、燕岳周辺のナワバリの北限は北燕岳の北側であった。
- 9月22日よりライチョウの生息域である爺ヶ岳に温度・湿度・日射量を計測するデータロガを設置し、観測を開始した。
- 山岳文化創出事業では、白馬三山周辺と爺ヶ岳～烏帽子岳周辺における登山史資料の未調査資料の掘り起こしを行った。また明治から昭和初期に行われた上記の山域における登山史について検証するため、山域の写真撮影、聞き取り等を実施し、山岳環境及び登山史ルートの現地検証調査を行った。
- 「山博おもしろミニゼミ」は今年度より休止し、付属園スタンプラリー(4月24日～5月5日、7月18日～8月16日、10月31日～3日)、「春の写生大会」(4月25日～5月6日)、「小鳥の声を聞く会」(5月9日)、「夜の動物見学会」(8月21日)、「消しゴムスタンプを作ろう」(10月30日)、「キノコ学習会」(9月27日)、「松ボックリツリーを作ろう」(12月11日)「親子探鳥会」(12月12日)を行った。



ニホンカモシカ「れんげ」(左)と「オタリ」(母親)

- ニホンカモシカの「ハクバ」(オス)と「オタリ」(メス)の間に6月9日に1頭(メス・のちに一般公募により「れんげ」と命名)が誕生した。
- 平成3年10月30日にオーストリアのアルペン動物園より寄贈されたシベリアオオヤマネコ(オス・愛称アイガー)が11月15日に敗血症、肺胸膜炎により死亡した。これにより博物館におけるシベリアオオヤマネコの飼育個体はいなくなった。
- サクラソウの栽培展示を4月30日～5月15日に市役所前で行った。
- 「第11回ライチョウ石川大会」が11月13～14日に、石川県政記念しいのき迎賓館にて開催された。

資 料

1. 市立大町山岳博物館条例

昭和 57 年 3 月 29 日
条例第 12 号

改正 昭和 61 年 3 月 24 日条例第 8 号 平成元年 3 月 24 日条例第 7 号
平成 4 年 3 月 31 日条例第 8 号 平成 5 年 12 月 24 日条例第 32 号
平成 12 年 3 月 29 日条例第 13 号 平成 13 年 3 月 27 日条例第 13 号

市立大町山岳博物館条例（昭和 29 年条例第 18 号）の全部を改正する。

（目的）

第 1 条 この条例は、博物館法（昭和 26 年法律第 285 号。以下「法」という）第 18 条及び地方自治法（昭和 22 年法律第 67 号）第 244 条の 2 第 1 項の規定に基づき、市立大町山岳博物館（以下「博物館」という）の設置及び管理運営に関し、必要な事項を定めることを目的とする。

（設置）

第 2 条 山岳に関する資料並びにこの地方における民俗、歴史その他の資料を収集して、保管又は展示し、一般の観覧に供し、本邦における山岳文化等の普及並びにこれらの資料の調査研究を行うため博物館を設置する。

（名称及び位置）

第 3 条 博物館の名称及び位置は、次のとおりとする。

市立大町山岳博物館 大町市大町 8056 番地 1

（職員）

第 4 条 法第 4 条の規定による館長、学芸員のほか必要な職員を置く。

2 必要に応じ顧問及び嘱託員を置くことができる。

（観覧料）

第 5 条 博物館を観覧しようとする者は、別表第 1 に定める観覧料を納付しなければならない。ただし、次に掲げる者は、この限りでない。

- (1) 6 歳未満の者
- (2) 市内の小学校及び中学校に在学する児童又は生徒
- (3) 市内に住所を有する満 65 歳以上の者

（使用料）

第 6 条 博物館の設備使用料は、別表第 2 に定めるとおりとする。

（観覧料の減免）

第 7 条 大町市教育委員会（以下「教育委員会」という）は、特別な理由があると認めるときは、観覧料を減免することができる。

（資料の特別利用）

第 8 条 博物館資料を学術研究等のため特に利用しようとする者は、教育委員会の承認を受けなければならない。

（賠償責任）

第 9 条 故意又は過失により、博物館の資料、施設等を破損し、又は滅失したときは、教育委員会の命ずるところにより、これを原状に復し、又は損害を賠償しなければならない。

（博物館協議会）

第 10 条 法第 22 条の規定により、市立大町山岳博物館協議会（以下「協議会」という）

を設置する。

- 2 協議会の委員（以下「委員」という）の数は、15人以内とし、教育委員会が委嘱する。
- 3 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。
（委任）

第11条 この条例に定めるもののほか必要な事項は、教育委員会が別に定める。

附 則

- 1 この条例は、昭和57年6月5日から施行する。
- 2 この条例施行の際、現に市立大町山岳博物館条例（昭和29年条例第18号）第5条の規定により委員として委嘱された者は、この条例第10条の規定により委嘱されたものとみなし、任期は、同条第3項の規定にかかわらず、昭和58年3月31日までとする。

附 則（昭和61年3月24日条例第8号）

この条例は、昭和61年4月1日から施行する。

附 則（平成元年3月24日条例第7号）

この条例は、平成元年4月1日から施行する。

附 則（平成4年3月31日条例第8号）

この条例は、平成4年4月1日から施行する。

附 則（平成5年12月24日条例第32号）

この条例は、平成6年4月1日から施行する。

附 則（平成12年3月29日条例第13号）

この条例は、平成12年4月1日から施行する。

附 則（平成13年3月27日条例第13号）

この条例は、平成13年4月1日から施行する。

附 則（平成17年12月6日条例第30号）

この条例は、平成18年1月1日から施行する。

別表第1（第5条関係）

種別	区分	単位	観覧料
一般	大人	1人	400円
	高校生	〃	300
	小人	〃	200
団体 (30人以上の場合をいう)	大人	〃	350
	高校生	〃	250
	小人	〃	150

備考 特別の資料を展示する場合は、1,000円の範囲内においてその都度教育委員会が定める額とする。

別表第2（第6条関係）

望遠鏡使用料	1回	100円
--------	----	------

2. 市立大町山岳博物館規則

昭和 57 年 3 月 30 日
教育委員会規則第 3 号

改正 平成元年 3 月 31 日教委規則第 3 号 平成 9 年 12 月 26 日教委規則第 3 号
平成 12 年 3 月 30 日教委規則第 9 号

(趣旨)

第 1 条 地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和 31 年法律第 162 号）第 33 条第 1 項及び市立大町山岳博物館条例（昭和 57 年条例第 12 号。以下「条例」という）第 11 条の規定に基づき、市立大町山岳博物館（以下「博物館」という）の管理運営並びに市立大町山岳博物館協議会（以下「協議会」という）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(職務)

第 2 条 館長は、上司の命を受け、館を統括し、所属職員を指揮監督する。

2 学芸員は、館長の命を受け、博物館法（昭和 26 年法律第 285 号）第 4 条第 4 項に規定する職務を遂行する。

3 その他の職員は、館長の命を受け、職務を遂行する。

4 館長を補佐するため、副館長を置くことができる。副館長は、係長相当職をもって充てる。

5 嘱託員は、学術に関する職務に従事する。

(休館日)

第 3 条 博物館の休館日は、次のとおりとする。ただし、臨時に開館又は休館することができる。

(1) 毎週月曜日

(2) 国民の祝日に関する法律（昭和 23 年法律第 178 号）に規定する休日の翌日（この日が月曜日に当たるときは、その翌日）

(3) 12 月 29 日から翌年 1 月 3 日までの日（前号に掲げる日を除く）

(開館時間)

第 4 条 博物館の開館時間は、午前 9 時から午後 5 時までとする。ただし、教育委員会が特に必要と認めるときは、これを変更することができる。

(観覧券の交付)

第 5 条 条例第 5 条の規定による観覧料の納付があったときは、観覧券（様式第 1 号）に領収印を押印し、交付するものとする。

(観覧料の減免)

第 6 条 条例第 7 条の規定による観覧料の減免を受けようとする者は、博物館観覧料減免申請書（様式第 2 号）を教育委員会に提出し、承認を得なければならない。

(博物館資料の利用等)

第 7 条 条例第 8 条の規定により博物館の資料を利用しようとする者は、市立大町山岳博物館資料特別利用許可申請書（様式第 3 号）を教育委員会に提出し、承認を得なければならない。

2 前項の規定による資料の利用期間は、30 日以内とする。ただし、教育委員会が必要と認められた場合は、延長することができる。

(入館制限等)

第8条 教育委員会は、次の一に該当するときは、入館を拒否し、退館を命じ、又は許可を取り消し、その他必要な措置を講ずることができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあると認められるとき。
- (2) 管理上支障があると認められるとき。
- (3) その他教育委員会が必要と認めるとき。

(資料の寄贈及び寄託)

第9条 博物館は、資料の寄贈及び寄託を受けることができる。資料を寄贈及び寄託しようとする者は、博物館資料寄贈・寄託書(様式第4号)を教育委員会に提出するものとする。

- 2 寄託を受けた博物館資料は、寄託者の請求によりこれを返還する。
- 3 博物館は、寄託を受けた博物館資料が災害その他不可抗力によって滅失又は損傷した場合は、損害賠償の責を負わない。
- 4 寄贈又は寄託を受けた博物館資料は、一般の資料と同一の取扱いをするものとする。

(資料等の滅失・損傷)

第10条 館長は、博物館の資料、施設等が滅失又は損傷したときは、速やかに教育委員会に報告し、その指示を受けなければならない。

(協議会の組織)

第11条 協議会に、委員の互選による会長及び副会長各1名を置く。

- 2 会長は、会務を総理し、会議の議長となる。
- 3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。

(協議会の会議)

第12条 協議会の会議は、館長の諮問により会長が招集する。

- 2 協議会は、委員の過半数が出席しなければ会議を開くことができない。
- 3 会議の議決は、出席委員の過半数の賛成がなければならない。

附 則

- 1 この規則は、昭和57年6月5日から施行する。
- 2 市立大町山岳博物館規程(昭和29年教育委員会規則第9号)及び市立大町山岳博物館協議会規程(昭和29年山岳博物館規程第1号)は、廃止する。

附 則(平成元年3月31日教委規則第3号)

この規則は、平成元年4月1日から施行する。

附 則(平成9年12月26日教委規則第3号)

この規則は、平成10年1月1日から施行する。

附 則(平成12年3月30日教委規則第9号)

この規則は、平成12年4月1日から施行する。

様式(省略)

3. 大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会設置要綱

平成 17 年 7 月 7 日
教育委員会告示第 8 号

(趣旨)

第 1 大町市におけるライチョウ保護事業の計画を策定するため、大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第 2 委員会は、ライチョウの保護事業に関する計画の策定及びその他計画策定上必要な事項を検討するものとする。

(組織)

第 3 委員会は、委員 10 人以内で組織し、学識経験を有する者のうちから教育委員会が委嘱する。

(任期)

第 4 委員の任期は、ライチョウ保護事業計画の策定業務が終了するまでとする。

第 5 委員会に委員長及び副委員長各 1 人を置き、委員が互選する。

2 委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代理する。

(オブザーバー)

第 6 委員会にオブザーバーを置くことができる。

2 オブザーバーは、ライチョウの保護事業に関し、必要な意見を述べることができる。

(会議)

第 7 委員会の会議は、委員長が招集し、議長となる。

2 委員長は、必要があると認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を求めることができる。

(事務局)

第 8 委員会の事務局は、市立大町山岳博物館に置く。

(補則)

第 9 この要綱に定めるもののほか必要な事項は、別に定める。

附 則

この告示は、告示の日から施行する。

4. 山岳文化都市宣言

今から 50 年前、戦後間もない混乱期に、地元の青年たちは、文化、それも地方から発信する独自の地域文化の創造を求めて運動を行い、山岳博物館の創設を果たしました。

半世紀たった今日、時代の移り変わりとともに、山岳博物館や大町市の果たすべき役割もあらためて問われています。市立山岳博物館開館 50 周年を機に、先人たちが唱えた、地域文化の集約と発信という原点に再度立ち返りながら、新しい価値観に基づく山岳文化の創造をめざして、次のように山岳文化都市宣言を行います。

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人が共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

21 世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館開館 50 周年の節目にあたり、山岳博物館創設当時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる 21 世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人が共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

平成 14 年 3 月 15 日
大 町 市

5. アルペン動物園との友好提携協定の締結

昭和60年2月18日、オーストリア・インスブルック市のアルペン動物園と当館は、次のような目的による友好提携協定について締結をした。

「同じような自然環境に囲まれたインスブルックと大町両市の市長は、その締結を大いに歓迎し、また両市民は文化をはじめさまざまな分野において、緊密な交流をはかり、それを通じて相互信頼と友好を深め、将来にわたって、インスブルック市と大町市の繁栄と幸福のために貢献する。」(同協定書より抜粋)

6. 信州大学山岳科学総合研究所との研究協力協定の締結

平成17年7月5日、信州大学山岳総合研究所と当館は、次のような目的による研究協力協定について締結をした。

「山岳および大町市とその周辺地方の民俗、歴史などの資料を収集、保管、展示し一般の観覧に供し、本邦における山岳文化などの普及並びに調査研究を行う市立大町山岳博物館と、信州の自然と社会をフィールドとして、山岳及びそれに連なる里山における自然と人間の相互関係にかかわる諸問題の解決を目指した研究を行い、新しい学問領域「山岳科学」を創造しようとする信州大学山岳科学総合研究所は、相互の連携の意義を深く認識し、自然と人間の共生の諸課題探求に力をあわせて貢献するため、ここに研究協力協定を締結する。」(同協定書より抜粋)

7. 入館者状況

(単位：人)

年度	有料入館者							無料入館者			
	個人			団体			計	一般 減免	市内		計
	大人	高校生	小中生	大人	高校生	小中生			65歳 以上	小中 生	
昭和 26	291		100	21		77	489				
27	2,425		1,022	186		1,514	5,147				
28	8,922		2,229	725		1,216	13,092				
29	7,779		1,831	625		1,189	11,424				
30	6,831		1,664	1,445		945	10,885				
31	2,148		888	1,036		858	4,930				
32	1,934		658	826		1,880	5,298				
33	2,979		1,032	1,469		2,417	7,897				
34	2,972		626	1,727		1,788	7,113				
35	3,635		878	1,943		2,143	8,599				
36	4,181		1,329	2,132		2,521	10,163				
37	5,313		1,633	4,549		2,748	14,243				
38	6,394		1,854	4,727		2,918	15,893				
39	10,464		1,658	12,600		1,520	26,242				
40	14,214		1,696	8,050		1,600	25,560				
41	10,399		1,711	13,070		1,500	26,680				
42	12,891		1,649	8,301		3,059	25,900				
43	18,458		2,071	17,769		3,240	41,538				
44	16,273		2,100	10,845		3,749	32,967				
45	13,405		1,941	11,623		3,960	30,929				
46	18,414		3,001	14,718		3,193	39,326				
47	17,500		3,025	13,268		6,877	40,670				
48	25,809		4,178	22,612		5,774	58,373				
49	28,702		4,277	23,432		5,843	62,254				
50	32,345		4,896	23,616		6,835	67,692				
51	32,111		5,142	25,150		8,200	70,603				
52	26,155		4,311	18,907		5,327	54,700				
53	26,346		4,158	24,903		8,722	64,129				
54	27,769		4,485	25,089		6,600	63,943				
55	25,743		4,414	19,909		6,972	57,038				
56	31,697		7,558	16,182		9,695	65,132				
57	31,894	809	6,400	10,391	5,827	6,929	62,250	7,965			7,965
58	33,590	988	6,632	15,885	7,992	12,303	77,390	9,026			9,026
59	30,335	816	5,905	12,969	9,172	15,070	74,267	8,117			8,117
60	36,686	1,142	8,025	22,782	8,559	15,902	93,096	6,770			6,770
61	34,797	1,086	6,109	16,001	8,107	16,069	82,169	4,509			4,509

年 度	有料入館者							無料入館者			
	個人			団体			計	一般 減免	市内		計
	大人	高校生	小中生	大人	高校生	小中生			65歳 以上	小中 生	
昭和62	33,132	918	5,581	18,751	7,065	17,186	82,633	3,605			3,605
63	36,116	841	5,932	14,947	6,085	14,735	78,656	6,269			6,269
平成元	41,018	1,199	6,450	13,191	4,650	10,527	77,035	3,709			3,709
2	43,444	1,108	6,752	16,486	3,045	7,119	77,954	4,844			4,844
3	47,004	1,276	7,313	13,817	4,212	8,278	81,900	4,577			4,577
4	42,197	725	5,719	13,068	1,687	7,015	70,411	3,413			3,413
5	45,182	809	5,807	12,249	2,807	5,325	72,179	3,587			3,587
6	38,354	933	4,809	10,561	1,932	4,974	61,563	3,376			3,376
7	37,356	981	4,650	9,493	1,840	4,164	58,484	5,376			5,376
8	36,002	869	4,189	6,601	1,905	2,244	51,810	2,174			2,174
9	31,119	626	3,417	7,626	1,245	2,100	46,143	1,429			1,429
10	28,219	637	3,105	6,023	764	2,006	40,754	1,686			1,686
11	24,220	482	2,200	4,766	561	1,183	33,412	1,206			1,206
12	23,082	501	2,273	5,344	648	1,024	32,872	1,187			1,187
13	24,064	439	2,163	3,389	671	1,577	32,303	1,497	387	826	2,710
14	20,527	472	1,744	2,518	675	808	26,744	1,013	191	451	1,655
15	19,693	535	2,152	2,184	785	1,082	26,431	990	285	616	1,891
16	14,664	376	1,073	2,875	602	644	20,234	604	51	662	1,317
17	12,065	213	630	3,138	692	928	17,666	1011	97	491	1,599
18	14,056	135	996	3,120	545	1,836	20,688	1,825	162	688	2,675
19	10,991	120	742	2,401	407	1,037	15,698	1,087	94	693	1,874
20	11,532	130	803	2,766	381	578	16,190	1,518	188	619	2,325
21	11,269	100	704	3,055	61	1,098	16,287	1,164	143	348	1,655
22	9,578	103	594	2,665	466	467	13,873	955	116	203	1,274

市立大町山岳博物館60年の歩み

発行日 平成23(2011)年11月1日
発行・編集 市立大町山岳博物館
〒398-0002 長野県大町市大町8056-1
TEL 0261-22-0211 FAX 0261-21-2133
URL:<http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/>
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
印刷 有限会社 北辰印刷
〒398-0002 長野県大町市大町3871-1
